
Fate/Je suis inconnu

ピロシキィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

F a t e / J e s u i s i n c o n n u

【Nコード】

N 2 2 9 6 Z

【作者名】

ピロシキィ

【あらすじ】

どっかの世界の英雄が転生して一般人（自称）として生活していたら、聖杯戦争に巻き込まれました。

プロローグ（前書き）

はじめまして。

お手柔らかにお願いします。

プロローグ

夢を見た

片田舎にある村で生まれ、
いつか世界を見て回ろうと夢想した幼年の頃

夢を見た

村の近くで拾った剣を只管、振り続けていた少年の頃

夢を見た

何もかもが光に満ち、自信に満ち溢れ
村を飛び出した少年と青年の間の頃

夢を見た

冒険者として駆け出し、己が道を信じ走り抜けた頃

夢を見た

一人、二人と、仲間が増え続け何時しか傭兵団として、
名を馳せていた青年の頃

夢を見た

数多の戦場を駆け、常勝不敗の褒美にと小国の姫を娶った頃

夢を見た

自分が王と成り、王国の栄華を齎した賢王と謳われた晩年の頃

英雄と呼ばれる者達の末路は非業の最期と言われるが、
余は如何であつたろうか。

今は病床に臥せる我が身なれど充足感に包まれておる。
なれば余は英雄ではないのだろう。

長き道程は想い歸せば一条の光の如し。

我が生涯に意味を成せたか、或いは無価値か。
それは余が死んでから歴史家達が創ること。

多くのものを手にし、そして零れ落ちたが、
歩んだ道に後悔など何一つも無く……

余は…いや俺は…最高に愉しい人生であつたと。

さあ、我が物語はここら終りぞ。

「…誰ぞ、我が剣を持て」

もう握る力も残っておらんが、
最期は生涯の戦友と共に往こう。

銘も無き王の剣　よ。

何処かの世界、何処かの国の王がその波瀾に満ちた生涯を終えた。

バイト行かねば

薄手のカーテンより朝日が差込み、ぼやける視界の元、
徐々に意識が覚醒していく。

「……………」

ここ最近、何故か頻繁に妙な夢を見る。

‘妙な夢’という用語弊があるな、あれは記憶だ。
魂に刻まれた前世の記憶。

輪廻転生、三界流転、流転輪廻、転生輪廻

読み方と多少の意味は違えど、人は生と死を繰り返す続ける。

生まれは死に、死には生まれ、その輪を回り続けるという事らしい。

つまり俺が何を云いたいかというと、

俺にはその『前世の記憶』があると。

我が生涯に一片の悔い無し の大往生を遂げた思ったら、

薄ら明るい光だけを感じふわふわとずっと微睡みの中にいる感覚が
今、考えれば一年ほどあったのだらうと思う。

当時は時間の感覚など無かったから、その頃はまだよかった……。

それから徐々に徐々に自我と感覚が出来てきて、いや目覚めてきて、
て、

あれ、俺もしかして赤ん坊になってる？

気付いてしまっただけは大いに狼狽えた。

いきなり赤ん坊。いやほんと参った。

口も満足に動かす事も出来ず、言いたいことも言えず泣き喚く。

排泄行為も儘ならない。前世の死ぬ前より酷い。

まさに羞恥。此れほどの屈辱を未だ嘗て味わっただろうか！？
否、前世の生まれた頃も同じようであつたろうがその頃の記憶は無いので断じて否である。

暗黒歴史トシテ我が記憶ノ奥底ニ封印ス。

兎に角、『前世の記憶』がある状態で再スタートした訳だが幼少の頃は体が弱かつた。

これは俺の推論だが、まだ出来立てホヤホヤの小さな器に九十余年の人生の記憶が、

入れば耐えられないだろ。

お猪口にバケツ一杯の水は入りませんよ。という事だ。

俺には自覚が無いというよりは「何かダリイな」位に感じていたただけだが、

生死の境を何度か彷徨っていたらしい。うん良く生きられたな。

お袋さんが「アンタは小さい頃、散々心配かけたんだから、もう今後は心配してやんない」

と中学校に入った頃仰いました。

そして一人息子置いて単身赴任中の我が父上様と遠い地で暮らしている。

……なんて親だ。

まあ無事ここまで育ててくれたんだ何も言うまい。

俺も俺で子供らしくない子供だっただろうから。

よく言えばとても賢い子供、悪く言えば老成していたといえる。

あまり手をかけることは無かつた筈だ。

しかし、『前世の記憶』というのは生きていく、成長する過程で弊害になることが多い。

言葉はまあ生まれた頃から何年も聞いてりゃ覚えられる、

若干他の子供と比べると喋れるようになるのが遅かったらしいが。文字は大変だったな。頑張って勉強しましたよ。義務教育有難う。というか教育水準の高さに驚きだ。

習慣や風習、文化に文明や伝統的行事に歴史は新鮮の一言だが、前世の概念があるからかなり戸惑いを覚えた。

そして、この世界の歴史を見たとき驚愕した。

世界は違えど人は争うものだ、戦争はあるだろうと思っていた。しかも何度も繰り返すのものだとも分かっていたが、

しかしこの数は異常だ。そもそも世界の人口からして違うが

ここまで戦死者が出るものなのか、それでも未だに世界のどこかで戦争をしているのだ。人とは業の深い生き物だと改めて感じた。

今の一学生である身分の俺が考えても詮無き事だが、

文明というかこの世界の科学というものは非常に恐ろしい。

効率的に大量に人を殺せる兵器とか最もたる物。

兵器じゃなくて生活に密着する科学は超便利だし、

いやもう、テレビやゲームに電気製品全般、俺も今じゃ無くちゃ生活できないが、

自堕落してしまう。

なんて恐ろしいのだ科学とは。

出来れば部屋に引き籠って一日中、

快適な温度に設定された部屋で歴史小説や漫画を読み、

ネットにゲームをして過していたい。

進路希望の紙に「自宅警備員」又は「ニート界の神」と書きたい。

きつと担任葛木あたりに説教食らうだろうが。

いやアイツは何考えてるか分からないから「そうか」の一言でも終わりそうな気もする。

……うん。試してみよう。

ただ葛木がどんな反応を示すのか見たいだけ。
自堕落な生活が送れるほどのマネーも無いし、
両親に迷惑をかけるわけにもいかない。
そしてこの世界も見て回りたいという夢がある。
一日あれば地球の裏側までいけるんだ。
前世より時間的には世界は狭い。いろんな国を見て回ろう。
ほんとにそう考えると、この世界は発達し繁栄してるといえるのだ
ろう。

魔法から科学に成り代ったのか、それとも元から魔法という概念な
ど無かったのか。
しかし歴史を見れば魔女狩りや異端審問など、あとは古い文献に妖
術や仙術に忍法など
名前が違えどそれっぽいものがちよくちよく出てくるのだ。
それを題材にした漫画や物語もなかなか面白いし、興味深いところ
もある。

現に前世ほどではないにしろ魔素は存在している。
俺は前者のほうがり得そうだと思う。

もつともこの様な事を言えば「厨二病はもう卒業しろ」などと言わ
れるだろう。

だが、しかし俺の前世は剣と魔法がガチな世界であったのだ。
所謂ファンタジーな世界。ドラ。エやエフエ。のような世界であり、
人間以外にエルフやドワーフ、獣人 多種族のこつちで言う知的生
命体がいたわけだ。

他にも竜や魔王に精霊なんかも居た。
それがこちらでは御伽話で存在すると言うのは偶然なのか。
もしかしたら俺と同じような存在が何処かに居るのかもしれない。
居ても居なくても世界を見て回り……。
あれ、なんか思考が完全に深みに嵌っているぞ。

何ゆえここまで深みに嵌った？

……そうそう最近やたらと前世の夢を見るってのが切欠か。

それに最近やたらと身体能力が上がってきている。

成長期ってレベルじゃないですよ最早、人外です。

もともと魔素を体内に取り込み魔法をぶっ放す事も出来たし、
取り込んだ魔素で一時的な肉体強化^{ブースト}できたから最初から人外だった
かも…。

いやいや、それにしたってここ最近の成長は尋常じゃない。

100mを本気で走れば金メダル確定位だったのが

今じゃ8秒切るし、ブースト^{ブースト}つかった日にゃ2秒とか有り得へん。

やった時は思わず乾いた笑いが出たぜ。

もちろん人が居るときは常識の範囲内で運動神経がいくらいの力
しか出してない。

この急成長は夢と関係がありそうなんだが、生憎と相談できる相手
が居ないのが現実だ。

「なあ俺さ最近前世の夢頻繁に見るんだけど、何でだと思っ？」

……無理だろ。

心配されるか、苦笑いで済むか、それとも軽蔑された目で見られる
か。

都市伝説の黄色い救急車呼ばれるかもしれん。

……どうにも成らないわ、切り替えよう。

おっと変な思考の海に沈んでいたら結構いい時間じゃないか。
そろそろ起きるか。

うゝ寒っ。

雪が積もることが無い地域とはいえ冬はやはり寒い。

でもバイトに向かわねば。

仕方ない布団から抜け出すとしよう。

学園は遅刻してもバイトは遅刻しないこれ俺の信条。

ヨッ！勤労学生の鏡っ！

と鏡の前で身嗜みを整えながら馬鹿なことを考えるのであった。

棚卸しをしよう

鉛色の雲が空一面に広がり、吐く息も白く 冬真っ只中。

正月気分も抜け、学生である自分も明日から学園に通わなくては行けない時期だ。

新都で働くスーツ姿の方々を横目で眺め、そんなことを考えながら 一路、

愛車に跨りバイト先へと向かう。

追伸、真冬のバイクはめっちゃ寒い。

バイト先であるコペンハーゲン。レンガ調の建物はお洒落だ。

一言で言えば 酒屋兼居酒屋 であるが、まあ色々とアレな人間が居る場所でもある。

「ちやーっす」

店内に侵入し適当な挨拶しながら酒屋のエプロン装着して準備完了。さてと、世界をめぐる資金を得るために本日も肉体労働に精を出しますか。

「ああ、おはようナッシー」

この妙な呼び名は俺にあてたものである。

何度言っても直さないの、もう諦めてはいるが、何とかならんのだろうか。

「どもネコさん。今日は棚卸しでいいんですよ？」

この店の一人娘の猫っぽい女性。

音子^{オトコ}という本名を何故か嫌ってネコ呼ばせてる。

穂群原学園に通っていたが、酒がらみで問題起こして自主退学したらしい。

英語教師の藤村と同級生だと言っていた気がする。

「そそ、年末年始と結構売れたからねえ。頼りにしているよ。」

亜麻色の髪を揺らしながら人懐っこい笑顔を向けられ、思わず頬擦りしたくなるが、耐えましよう。

忘年会シーズン、これからは新年会シーズン書き入れ時である事は確かだ。

まあ頑張りますよ。

「アイサー。ほんじゃあ倉庫に籠ってますから何かあれば言っして下さい」

「うん。エミヤンはもう倉庫に居るから」

「ういー」

ネコさんに後ろ手に振って倉庫へと向かう。

そこには橙色の髪の少年がいる。今の俺も同じく少年か。彼とは中学からの仲となる。

「よう衛宮。男子生徒の敵！ もげる！」

「なんでさ!?!」

リア充と俺よりイケメソは滅んでしまえばいいと思う。

コイツは自宅に後輩の可愛い女の子を毎朝毎晩呼んでアハンウフンの関係を一年くらい続けている。

アハンウフンは俺の妄想だが、一つ屋根の下でナニがあってもおかしくないと思う。

偶に登校の時とか二人で居るとこ見たりするし。

アレ？ それって……前日泊って朝二人で登校か？

ウレシ、ハズカシ、アサガエリならぬアサトウコウですか！

ソレなんてエロゲ？ 羨ましすぎる……。

よし、また今度夜飯をたかりにいくという口実の元、邪魔しに行くう。

「……衛宮はシネばいいと思う」

おつとつい口から本音が……。

「だから、なんでさ!？」

「お前などもう知らん！ あっちの棚は俺がやるから在庫表よこせ！

あと、近々お前の家に晩飯をご馳走になりに行く！」

「はあ？」

きよとんとしている衛宮少年の持っている紙を何枚か引ったくりズカズカ奥へと歩みを進める。

ちよつと大人気ないな俺も。

新しい生を受けて精神が肉体に引っ張られているのか？

こちらの生活になれて影響を受けているのか、

前世では女の一人や二人でどうということ無かったが、

俺が今チェリーb…もといボーヤだから、か。

何にしる曾孫にあたるような年齢の少年にする態度ではなかったな反省。

これも『前世の記憶』の弊害だな。

只、衛宮は少々イジリ甲斐があるからな。やめられない。
というよりは放置できない存在だ。

コイツの目指してるものはきつと、完璧超人エミヤ、なのだろう。
基本、ノー と言えない日本人では無く求められれば快く受ける。
または困っている者は見過ごせません。を地でいくのだ。
そこに見返りなどを求めていない。

その精神はとても綺麗で素晴らしい。だが、それ故に危うい。
衛宮の場合はもう病的というより 呪い に近い。

今のまま、それを続けていく果てに或るのはおそらく……破滅だ。

人とは業深き存在である。

小さな救済と言うのは道端に落ちた小銭であり、
人によっては最初こそソレをどうしようか悩むかも知れないが、
毎回道端で小銭を見つければ「おっラッキー」と拾い懐へ。

俺なら悩むことなく最初から懐へ入れる。

数日すれば拾ったことすら忘れるかもしれない。

衛宮からの救済が当たり前になり断られる事は無いと麻痺し、慣れる。

良心的な人間ならば 頼る ではなく 依存 で済むだろう。
これが恋人や妻であればお互い不幸になるだろうが、まだいい。

では、良心的ではない人間の場合なら、

便利な道具もしくは都合のいい奴隷となる。

そう 奴隷 である。

彼がそうなった時、人の業深さを見せ付けられ破滅するだろう。彼はきつとそうなってしまうに違いないという確信がある。だから放って置けないのだ。

自分の前世の少年時代に似ているが酷く歪んでいる。真っ直ぐだが、薄っぺらい そんな存在を。

「このリキュールが少ないな、これは店に並べて在庫発注せねば」

衛宮のことを考えながらもちゃんと棚卸している俺って凄くない？と自画自賛しつつ、一段落ついたので衛宮に目を向ける。

帳簿的なものにチェックを入れ、店に補充するものは酒の入ったケースを移動させている。

あれ重いんだよね。頑張れ少年。腰を痛めて今夜はお預けになっちゃうくらいに。

「なあ、^{ヤマナシ}月見里」

^{ヤマナシ}月見里というのは俺の名前で苗字の方である。

「なんだ衛宮？」

「今凄く鋭い視線を感じた気がするんだけど…」

ほほう俺のプレッシャーを感じ取ったと言うのかなかなかやる。

「よく気付いたな！ お前の腰がバツキリ逝ってしまえと願って

いた」

グツと親指を突き立てていい笑顔を作る。

「物騒なこと願うなよ!」

「さて、もう少し頑張るか」

衛宮を無視して仕事に戻るとしよう。

「うおい!」

後ろで喚いているような声がしているような気もするが、
アーアー聞こえないっしたら聞こえない。
それからちゃんと棚卸しました。

「エミちゃん、ナツシーお疲れ。はいコレ」

ネコさんが缶コーヒー2本持って倉庫に来た。

「お疲れ様ですネコさん。ありがとう」

「うえーっす」

缶コーヒーの差し入れ受け取り早速飲む俺。
なんだ士郎君は若干お疲れのようじゃないか、ケツ腰の運動ばかり
しているからそうなるんだ。

「もしかして全部終わったの？」

はて？　なんかネコさんの分かり難い表情が、余計分かり難くなっているが、
どうしてだろうか？

「「？」」

え？　なんで？　終らすといけないの？

「あのねエミちゃん。私も言わなかったのは悪かったけど今日全部終らせる、なんて言っていないでしょう？　君はすぐ頑張りすぎるんだから無理しちゃだめよ」

驚愕の新事実！！

「で、でも、ヤマナシ月見里も一緒だったから俺一人頑張った訳じゃ…」

「ナツシーは人で在って人に在らず　なんだから彼に合わせちゃだめ」

あれれ？　俺頑張ったのになんか褒められてないよ？
視界が霞むのはどうしてだろうか？今日の缶コーヒ―はほろ苦しよっぱいな……。

ヤマナシ 漢、月見里航　涙は流さねえ！

棚卸しをしよう(後書き)

主人公の名前発覚

昼食にしませんか（前書き）

プロローグ2日目くらい？

昼食にしませんか

冬休みが終わり学園生活が始まり、真冬の寒さが身に染みる今日、この頃。

山と海に囲まれた静かな地方都市は本日は良い天気である。

やはり太陽が出ると気温が暖かく感じられる。

家を出て穂群原学園まで通学路をしばらく歩いていると同じ制服を着た連中が、
ちらちら目に付くようになる。

そして登校する生徒の中に見知った姿を見つけ、声をかける。
今日は例の後輩と一緒に。おのれ、リア充め。

「よう大将。昨日はお盛んだったのか？ モゲてしまえ！」

「おはよう月見里。お前はそればかりだな」

しかめっ面しながら挨拶を交わす衛宮。

「おはようございます月見里先輩」

衛宮とは対照的な柔らかな表情の巨乳美少女。

頬がほんのり赤いのは俺の言葉で昨日の情事を思い出したからだろうか？

だが、その初々しさ、それがいい。相変わらず可愛いな。
衛宮の友人として一応、挨拶くらいはしてくれる関係だ。

「おはよう、桜嬢」

まごう さくら
間桐桜

1年ほど前から毎日衛宮の家に入り浸っている後輩の巨乳美少女だ。大事なことから2回言ったぞ。大は小を兼ねるだ、うん。衛宮いわく、妹のような存在　とのこと。だが、

「鈍感主人公はみんなそう言うんだ。それでいてあとで美味しく頂いちゃうんだ」

俺は断じて信じていない。

この子の反応見りや分かり易い位に行為…じゃなくて好意を衛宮に向けているじゃないか。気付いてないとは言わせない。気付くと言えば、この子……いや考えすぎか。

「何言ってるんだ？」

「そうだな。俺も大人になって一友人として祝福してやらねばな」
前も言ったがいつまでも嫉妬していても仕方が無い。

「おい！　月見里。　さっきから何を…」心配するな衛宮。
あの義兄ワカメの説得なら俺がしてやる！　主に肉体言語に限るがな」

そう桜嬢には兄がいる。コイツがもう女にモテる。ワカメなのに！
性格はワカメだからネチヨネチヨしていて、

…偶に本気で乾燥ワカメにしてやろうかと思う。

でも衛宮はこれから義兄となる奴になかなか色々言えまい。

だから俺が友人として衛宮に代わって話し合いをしてやろうじゃないか！

しばらくは女子に白い目で、見られようが俺は気にしない！

そうと決まればワカメを探しにGOGOGO！！

校舎に向かって走り出した。

「行っちゃいましたね先輩」

「そうだな桜。」

「ワカメって何のことでしょうか？」

「…さあな。アイツの考えてる事は俺には一生分からないと思う。

……俺達も行こう」

穂群原学園は今日も平和である。

昼前の授業は空腹との戦いである

89 1877
by ヤ・マナシワ・タル 伊 17

先生、お腹が、お腹が空きました。

ワカメ探して走り回ったのがいけなかった。

あと後ろから不意打ちのボー・アンド・アロー・バックブリーカーで体力使った。

超成長してるの忘れてて危うくワカメが帰らぬ人となるどころだったが、まあ満足した。

きつと今日一日くらい保健室だな。

ぐうつと腹の虫が鳴り、空腹に身悶える。

授業中に学食へ行ける筈も無く、

いや一度やったが英語教師の藤村タイガーに捕まり、職員室へ連行された。

そこで言い負かせて、脱出を試みたら場所が悪かった。

職員室である。

周りは教師ばかりで援軍は居なかった。

周りの教師に超睨まれた。気配を消しても脱出不可能だっただろうな。

藤村タイガーは涙を浮かべて教頭に泣き付くし教頭は教頭で生徒に言い負かされるとは何事かと藤村タイガー叱咤してカオス空間が誕生した。

その後、何故か校長に藤村タイガーと俺が怒られると言う展開で幕を閉じたが。

いい思い出と言うことにしておこう。

「Could you recommend a nice restaurant near here?

ハイ!!! ^{ヤマナシ}ここ月見里君。さあ立って日本語訳してみよう!

先生さつきからボーっとしているの知ってるんだからね!」

いきなり俺を指名する藤村タイガー。何故か偉そうにえっへんと胸を逸らす藤村タイガー。

あんた歳いくつだよ? 俺は前世入れると100超えてるがな。そんな態度だから親しみ易いもとい舐められるのだ。

……主に俺から。

「ココらでうまい飯屋はござらんか になります。
ポイントは学習などではないのでt e a c hじゃなくてr e c o
m m e dを使うこと
d e l i c i o u sじゃなくてn i c eを使うところがナイスです
ね」

訳は多少雑だが許容範囲だろ。

あ、俺トップとは言わないが成績いいほうなのだ。

「うう……」

「座つても？」

フツ、勝った。またつまらぬ虎を泣かせてしまった。
藤村タイガー若干涙目だぜ。

「むぐぐぐつ……」

タイガーが悔しそうに唸っているが無視だ。
腹減ったなあ。何かで気を逸らせぬものだろうか。
机に突っ伏しながら考える。

……。

……。

……窓の外を眺めていると隣の席の三枝と目が合う。

三枝の席は窓際であり、窓の外を見るには自然と三枝の方を見なきゃならないのだが。

「……っ」

あ、目逸らされた。この照れ屋さんめ。

さえぐさ ゆきか
三枝由紀香華奢な女の子。

可愛い顔立ちというか笑顔がなんか癒されるんだよな。

性格はおおらかで、物静か。

地味が悪いとはいわないがクラスで取り分け目立つ存在ではない。

…そう思っていた。席替えて隣になるまでこんな子居たか？ と感じたくらいだ。

…ゴメンな三枝。

でも、よくよく観察してみれば、必要最低限を除いて、

どうやら女子の中でそれとなく三枝を男と接触させないでいる。

人生経験でいけば、百を超えていると言うのに女子の考えは全く分らん。おなじ

いつも同じ部活の3人で行動しているのを見かける。

そういえば、偶に三枝は遠坂凜に何か話しかけて凹んでるよな？

とあさか りん
遠坂凜

穂群原学園に通う生徒なら誰もその名前を知っている。

容姿端麗・才色兼備・高嶺の花・優雅なお嬢様・学園のアイドル・
胸は将来に期待etc…など、

美辞麗句を並び立ててればまだまだ出てくるだろう。

それほどの有名人。

男女問わず人気がある優等生。確かに美少女だが、根からの悪人じやないだろうが、

なんか腹黒そうな気がするし一度ボコボコにされたし、俺は近寄り
がたいのだ。

というより彼女、魔法使いだろうし。

通常、魔法使いとは30歳まで純潔を守ってこそなれる崇高な職業
だが、

女性の場合は魔法処…ゲフン、魔法少女になるのだろうか？

……話が逸れた。

一先ず、都市伝説は置いておくとして。

何故、遠坂凜が魔法使いだと思うのか。

この世界の人間と言うのは基本、魔力というものを認識していない。
稀に無意識に魔力をコントロールしている者もいるが、そういう連
中って大抵、

有名なスポーツ選手や格闘家だったりする。

長年の鍛錬において肉体強化の魔法を自然に身に着けている。

もちろんちゃんとした物ではないから魔法と言いつても代物だが。

衛宮は、この類に思える。

で、一般人は魔力があっても何も起きない。
だが、それでもソレは在ってそれぞれの形があるのだ。

遠坂凜の場合、あきらかに異質。

魔法使いは万物の気配を知る。

『前世』で俺に魔法を教えてくれた人の言葉だ。

この場合の気配とは色や匂いや数字、の事を指す。

感じ方はそれぞれ違うらしいが俺の場合、匂いだ。

多かれ少なかれ人は魔力と言うものがある。

それを俺は匂いで感じ取る。

遠坂凜は無味無臭。

意図的に隠蔽しているとは思えない。

一度、隠蔽しているのか、すっげえ魔力量が少ないから感じないのか
分からなくて、告白かましてドサクサで抱きついた事がある。

……あの時の俺は若かった。

そしてボコボコにされた。

……あれはきつと中国拳法。

だがしかし、素直にやられる俺ではない。
意識が途絶える瞬間俺は見た！

……白だった

そんな訳で遠坂は意図的に隠蔽している事が判明したわけだ。
だが、奴には聞けない。
何故なら身の危険を感じるから、

「俺も魔法使えるんだ、あと前世の違う世界の記憶もあるんだぜ

！」

「そう、じゃあ解剖させて？」

ほら、人体実験されそうで怖いじゃない。

アイツから見ると俺は魔法が使える才能がある奴。
その程度の認識でいてもらいたい。

ほんと怖いから……。

「そ、そんなに…見つめないで下さい」

空腹から意識を逸らさせる為に思考の海にダイブしていたら、
三枝が恥かしそうにか細い声で囁いた。
癒されるわぁ。

こういう子お嫁さんにしたいタイプだよな。

「や、月見里くん」

「三枝はかわいいなー」

机に顔を載せたまま呟く。

というかずつとこの体勢だったんだな。

首が痛くなってきた。そろそろ空腹が限界です。

「…っ!!」

あらま、ほんま初心な子じゃ。

あまり弄るのも可哀相なのでこれくらいにしておいて

「じゃあ今日はここまで、日直さん号令」

やったチャイムなった!!

「起立 礼」

藤村タイガーが出て行くときに俺に向かつて「おぼえてるよー!」
と言って

出て行ったが気にすることじゃない。それより飯だ。

「なあ月見里」

「何か用か？ 美綴。俺はこれからバーベキューなんだが」

「ああ、学食かいそりゃ悪いね。でもちよつと待ちな」

みつづり あやこ
美綴綾子クラスメイトで弓道部主将。

サバサバした性格の美少女で、薙刀を初めとして数々の武道の達人らしい。

美人は武道をしていなければならない、と言っていたがどうなのその信条。

「間桐のことなら、反省もしていないが後悔もしていない」

「間桐？ あんた慎二の奴に何かしたのかい？」

え、ワカメのことじゃないのかよ。

ワカメも弓道部だし。

「心配するな覆面は被ったし、後ろから殺ったから面は割れてないハズ」

「答えになってないじゃないか、ていうかいつも物騒なんだよアンタは」

はあつとこめかみ押さえて溜息つく美綴。

「じゃあ、そういうことだから」

早く学食に行かねば空腹で倒れてしまう。

「私の用件が済んでないよ、まったく」

「じゃあ早くしてくれ hurry! hurry! あ、ちなみに弓道部のお誘いならノーサンキューです」

「衛宮といいアンタといいどうして、そう才能あるのに……」

弓道部のお誘いというのは、これは1年の時に体験入部の際、衛宮は会心出しまくって、俺は矢を三本番えて的に当ててたからだ。衛宮はその後入部したが怪我して辞めたんだっけ。

俺はワールドワイドの漢になるための資金集め、部活よりバイトを

選んだから。

美綴は衛宮を部に戻そうと、俺を入部させようと未だ画策しているわけだ。

「じゃあ今度こそ、そういうことで！」

話は終わった。財布の中身を確認。OKいける！

「だから待ちな。私の用件はそのことじゃないよっ！」

「おのれ美綴！ 兵糧攻めかつ！ この鬼畜っ！」

「落ち着け月見里！ すぐ終わるから聞け！」

「嫌だっ！ 何を食っても肉の味がする樂園に俺は行くのだ！！」

「あ、あの、よ、良かったら、お弁当多く作ってきちゃったので食べ…ますか？」

な、ん…だと？！

今まで空気と化していた三枝が驚愕の一言。

全俺が泣いた。

この後、弁当は航が美味しくいただきました。

結局のところ美綴の用件とは

遠坂が今日休みだからアンタ何か知らないかと言っことらしい。知る訳ないじゃん！ っていうか居ない事自体、今知ったわ！

何で俺にそんなこと聞くんだったか……。

それよりも三枝が多く作った弁当はもともと遠坂と一緒に食べようと作ってきたものであった、複雑な気分だ。

フラグが立ったと思ったのにチクショー！

昼食にしませんか（後書き）

主人公は魔術と魔法の違いがわかってません。
魔力を使うものが全部魔法と言う解釈。

召喚してみる（前書き）

士郎君はランサーと追いかけてっここ中

召喚してみる

今日も今日とて学校ですたい。

何でバイク通学禁止やねん。

だから歩いて登校です。

何時もより早く家を出てしまった為か、まだ通学している生徒は疎らだ。

三枝の弁当旨かったな……。

昨日、ほんのり甘い昼食タイムだったのを思い出す。

今日もそれを味わえると思うほど夢見る少年じゃない。

あわよくば、……いや、やめよう。現実はいつも残酷だ。

……いいじゃないか俺、学食嫌いじゃないし。

穂群原学園の学食。

大雑把な味付け故に女子には受けが良くない。

というより、「なに食べても肉の味しかしねえ」とは誰の言葉だったか……。

まさしくその通りなのだが、俺は好きだ。たまに胸やけするけど。

パチッ

「ぐっ、痛っ」

校門を抜ける時に静電気というには温い、体中に電気が走る感覚を覚える。

思わず立ち眩みに似た症状が出てふらつく。

うつ、手を膝に付き深呼吸する。

おいおい…、本気かよ…。

昨日までは感じなかった圧倒的な違和感。

まるで凶悪な魔物が大きな口を開けて待っているような、不快感が襲ってくる。

結界。まだ発動していないが発動させちゃならねえ類の。

こんな物騒なものを仕掛けた人物は一体何を考えている。
いや、そもそもこの大結界と読んでもいい代物を一人が作ったのだろうか？

しかも一日で。

……遠坂か？

確かに今の頭の中の情報だと一番、黒だ。
アイツ以外魔法使える奴知らない。

しかし理由は？

愚民どもよ我が前に跪け 的な……。
昨日、新都のビルの屋上で下界を見下していたし。
学園休んでまでする様な事だろうか。

それが準備の為なら？

無理だ。数時間で作れるような物じゃねえ。

何人かで何週間かかるような代物。

新都のビルに行く意味も無い。

本気であるなら朝一から学園で作業に勤しむ。

いや、待てよ、それはあくまで俺の『前世の常識』ではないのか？

こちらの世界の魔法師はこれくらい当たり前前にやってのけるということか…。

それだと俺はもう、お手上げだな。

しかし前世ほどでは無いが、それなりに体も鍛えてるし、

魔法も簡単なものなら扱えるし、多少の耐性も備えている。

やり方によっては、或いは…。

だが、これほどの結界を数時間程度で作り上げることの出来る人物と勝負して勝算は？

一体どれほどの威力の魔法を放ってくるのか、背筋に嫌な汗が流れる。

ならばこの件は放置し、安全なところに避難するか？

巫山戯んなっ！　こんな大規模撲滅イカレ結界放置なんぞ出来るか！
誰だか知らないが上等っ！　売られた喧嘩は買ってやるぜ！

うしっ、そうと決まれば授業サボって結界に嫌がらせしてくれようぞ。

あと、遠坂の様子も探らねばならんし…、

しまった！

もし犯人が遠坂の場合、結界が出来たその日から教室に居ないじゃ、気付かれたと警戒され、かなり怪しまれる。

その逆もだ、遠坂が犯人じゃない場合でも、

この結界の存在に気付く↓　誰がやった？　↓　今日、朝から俺が居ない。

↓　アイツ魔法の才能がある。↓　怪しい

作戦変更。一時限目は出席して遠坂の様子見。
それによって取る行動を考えよう。

「むっ、どうした月見里？」

「…柳洞か。急に立眩みがな。どうやら体調が悪いようだ」

「鬼の霍乱とは、よもや珍しいこともあるものだ」

我が学園の生徒会長。柳洞寺の坊主の倅。

真面目でいい奴なのだが奈何せん真面目すぎである。

将来ハゲそう。あつ、どうせ坊主になるから関係ないか。

「酷い言われ様だ。心配しやが…れ…?」

「どうした?」

「すまんが肩を貸してくれ」

「む、大丈夫か? このまま保健室に行くか」

柳洞の肩を借りながら歩き始める。

「…いや、教室でいい。座って休めば落ち着くだろう」

「そうか、だが無理はするな?」

やはりな。柳洞に魔力的な干渉が見られるおそらく暗示の類。

こちらにも干渉させてもらおう。発動条件は分らんが、行為の上書きなら…よし、いける!

「……ああ。そうだな。ところで最近何か変わった事とかなかったか?」

なるほど、発動すると相手を殺めると。こらまた陰湿な暗示だ。

「いや、取り分け無い。ああ、親父殿が偶には禅を組みに来いは言っておった」

「はは、そうか。宜しく言っといてくれ」

他愛の無い会話を続けつつ上書きするって結構疲れる。

しかし、誰がこんなものを？ 随分とタイピングがいい。

結界のほうと同一人物、少なくとも何らかの関わりはあるよなあ。

「うむ」

よし、上書きうまくいった。発動すると……くくく…。

発動しないことを祈ろう柳洞の為にも。

昼休み

一時限目、案の定に遠坂は俺を疑いの目で見ていたが、

朝、柳洞の肩を借りて来た事や、体調が悪そうに装っていたから、

結界のせいで体調悪くなったと思ってくれたらしく、

とりあえずの警戒を解いたっぽい。

俺もなかなかの演技力だったし、本気で心配してくれた三枝にちょ

っと萌えたのは内緒。

それでも小国の王をしていた身ぞ。腹芸一つや二つどつと言つ事無

いわ。

というわけで、次の授業から保健室に行くと言うことにして、学園内を探索。

結界の基点を何箇所か見つけてちよいちよいと嫌がらせの上書を施し、

最後、屋上に見つけたこの基点に俺の執念を込めた盛大な嫌がらせを書き終えたところだ。

真冬の屋上になんか人が来ないから結構派手に出来ましたよ。

ふつ。いい汗かいたぜ。疲労感がツパネエ。

まあ、出来る限りはやったが消すことは俺の腕じゃやっぱり無理だったが、

しかし、しばらくは発動できまい。

その間に出来ること考えねばな、帰って使い魔でも召喚してみるか。文字通り猫の手も借りたいくらいだしな。俺一人じゃ監視も儘ならん。

でも今は疲れたから、保健室で寝よ。

そして夕方、自宅。

保健医に叩き起こされ自宅へ帰還してきた。

なんでも6時までには完全下校になつたらしい。
最近物騒だからだつてさ。

…知ってる、あんな結界あるしな。

というわけで、人手が足りないので使い魔を召喚したいと思います。
召喚した使い魔を放って情報収集に勤しみ現状把握というわけだ。

その為に帰り道、文具屋で大きな紙を購入してきた。

Q 何に使ったって？

A 魔法陣を描く為です。

我が家は築7年 木造2階建て 普通の家です。

床や畳、壁に描ける訳無い。

描いたら父上と母上に追い出されるかもしれないじゃないか。

父上様に限っては息巻いて家建てたのに転勤で1年と我が家で暮らしていない。

ちよつと残念な人なんだ。

だから、なるべく綺麗に保っておかないと可哀相じゃん。

さてじゃあ、やるか。

使い魔の召喚 3分クッキング風

用意するもの

・ 大きい紙 一枚

・ 自分の血 適量

・ 水性絵具（紫）

・ 魔力 適量

場所は自分の精神が一番落ち着けるところがいいでしょう。

今回は自分の部屋です。

・ 先ず初めに水性絵具と自分の血を溶いていきます。

絵具の色に関しては好きな色でどうぞ。

今回の色は量が大変余っていたので使用したまでです。

- ・次に溶いたものを使用して白い紙に魔方陣を描いていきます。

この時のポイントは魔力を流しながら行ってくださいね。
多すぎても少なすぎても紙が破れてしまいますから気をつけましよう。

- ・完成した魔法陣をしばらく放置して自然に乾かします。

ドライヤーなどを使用して乾かそうとするとドライヤーの風で、
滲んだり、崩れたりしますのでお勧めできません。

- ・乾いた魔法陣の真ん中に手を置いて再び魔力を流し込みます。

ここでも今回使用した紙はデリケートなので、
あまり魔力を流し込み過ぎないようにしましょう。

- ・最後に呪文です。

「…我が呼びかけに応じ来るモノは我が血肉を代価として与えん」

今回の詠唱呪文に 血肉を代価 とありましたが、実際に血や体の一部

を与えなくても大丈夫なので安心しましょう。

今回の召喚はあくまで小動物的なものを想定しているためです。

悪魔や精霊の場合は文字通り、ご自身の血肉または魂など必要な場合があります。

「来たれ我が手足となる下僕よ！」

・魔法陣が強い光を発して何か手応えがあれば成功です。

今回の『使い魔の召喚』は魔法入門2月号にも掲載されています。
それでは、また。

閃光と紫電が魔法陣から発せられ徐々に収まりを見せていく。

「……………なんでさ！」

おっと思わず衛宮の口調が移ってしまった。

落ち着け、これは果たして成功したと言えるのか？

生物じゃなくて無機物だと！？　しかしこの慣れ親しんだ重みと手触り。

本当に懐かしい。

まさしくそれは　剣　だった。

暫く混乱と懐かしさが混じりあった思考が落ち着き、冷静になってきた。

全然意味が分からん。

自由に出現させたり、消したり出来るのは便利だが…、どうしろと？

ふう腹減ったな、衛宮の家に晩飯たかりいこう。

深く考えるのを放棄した。

召喚してみる（後書き）

ストックはもうない

青いタイツの男（前書き）

せいばあさんはけいわいだとおもう byわたる

青いタイトルの男

皆さん、こんばんわ。

衛宮さん宅へ晩御飯を頂戴しに参ったわけですが、家主が ガシャンという盛大な音と共に窓を突き破って出てきました。

また、その窓から青いタイトルの男性が赤い棒もって出てきて、衛宮君を蹴り飛ばしました。

こついう場合はどう反応するのが正解でしょうか？

つて馬鹿ああー！！！！ 落ち着いてる場合かつ！！

止める止める！！

アイツはヤバイ。ヤバ過ぎる。

動きもそうだが殺気が人間のそれと次元が違う。

衛宮を助ける！ と自分に喝を入れる。

トクンつと一瞬脈打つ鼓動を感じ、一気に衛宮へと駆ける。

「やめろおおお！！」

だが、僅かに遅かった。いつも以上に疾く駆けたにも関わらず、青タイトルの蹴りが再び衛宮を襲い、それを喰らった衛宮は土蔵へと

姿を消した。

「チツ、小僧の知り合いか？」

良かった。土倉を背に青タイトの前に滑り込んだので、衛宮の姿は確認できないが生きている。ダメージは負っているだろうが、

致命傷と言っほどのものは無さそうだと気配で感じ取る。

「……」

「フンツ、まあいい何者が知らねえが死んでもらうぜ」

「随分とお喋りな暗殺者のようだ。口を動かす暇があれば、先ずは得物を動かすべきだ。それとも貴様の得物は飾りか？」

久しぶりだ。一瞬でも気を抜けば命を刈られるような緊張感だが、それと同時にとてもない高揚感。自然と頬の筋肉が釣りあがっていく。

「小僧っつ！！ その物言い地獄で詫びろッッ！」

色々考えるのは後回しだ。今は目の前の危機を乗り切るのが先決。

「… Ouvrez」

生涯の相棒よ。今一時、再び共に参ろうぞ。

「なにっ!？」

ランサーは驚愕の表情を浮かべた。
放たれた高速の突きを弾いた目の前の男。
一撃で仕留められるハズだった。

そう、ハズだった…。なのだ。

実際に今も目の前の男は健在。そして握られたる武骨な剣。

ランサーは驚愕を止め、2度、3度、4度、と己が槍を振るい突く。

その繰り出す攻撃回数を増やしていく。

だがどうだ、目の前の男はそれをまた凌いで見せた。

さつきまでの雰囲気とはまるで別もの。

いや、最初の物言いのところから感じた僅かな違和感。

只の人間がサーヴァントの重圧を受けて、顔色一つ変えずに減らず口を叩けるのか？

今、それはさらに大きくなり、一つの疑問となる。

「…貴様、セイバーか」

「さてな。セイバーという物が軍刀を指すなら違うと答えよう」

男は若干、眉を顰めた後に答えた。

本当に知らないのか？ それとも挑発しているのか？

「……………」

あまりに不可解なこの状況にランサーも迂闊に手を出すことを躊躇った。

その時、男の後ろの建物、先ほど蹴り飛ばした少年が突っ込んだ場所から光が零れた。

次の瞬間、目の前の男が吹き飛ばされた。

そして次はランサーの番だった。

咄嗟に槍を盾に防いだが、後ろに後退させられた。

「今度こそ本物か……。よう……」

突如現れた銀の鎧を纏った黄金色の髪の少女。そして自分を吹き飛ばした張本人。

武器は持っていないがどんなトリックだ？

と内心考えながらもランサーは不敵に少女に語りかけた。

ワタルです。

さっきまで戦闘していたら急に後ろから現れた何者が盛大に吹き飛ばされたのです。

僕が何をしたと言うんですか、全身が軋んでいるとです。

「くそっ、ブーストがかかってなかったら完全に逝ってたな」

土蔵の方から突如として感じたプレッシャー。

飛び出してきた銀色が斬りつけてきたがギリギリ剣を体との間に滑り込ませ、

防御に成功したものの、一瞬だが闇に落ちた。

暗転した視界が戻れば自分が地面に這い蹲っている事に気付く。

立ち上がり周囲を見回せば、さっきの青タイツと凜々しい表情の少女が戦っている。

「何がどうなってんだ？」

考えるに、俺をゴルフボールよろしくフルスイングしてくれちゃったのは、

…あの女の子だろう。

情報が少ないのでどちらかに加勢するかどうかも悩む。

普通に考えれば今まで命の取り合いをしていた相手より女の子の方に付くべきなのだろうが。

…俺をいきなり斬り飛ばしてくれた相手だ。

とても友好的だとは思えん。

俺が思考している間にも騎士風少女と青タイツは化け物染みた戦闘を繰り広げている。

「どうしたランサー、止まっただけでは槍兵の名が泣くぞ。」

そちらが来ないのなら私が行くが」

「……は、わざわざ死にに来るか。それは構わんが一つ聞かせろ。貴様の宝具——それは剣か？」

なるほど、少女の手には何か握られている。

それが武器と言うことは分かるが、……風を纏って不可視にしているのか？

「さあどうかな、戦斧かもしれぬし、槍剣かもしれぬ。いや、もしかしたら弓ということもあるかもしれぬぞ、ランサー？」

「はっ、ぬかせ剣使い」

ああ、やはり剣か。前の生涯を通して聖剣や魔剣を何度か見たことがあるが、

あれはそういった類のもの。そしてあの輝きからして前者。

きっと強力な呪符は持ち主に栄光や勝利を齎すのだろう。

だが、誤れば破滅も齎す。

その巨大な力ゆえに、どんな聖者だろうか力に溺れる事がある。

そして破滅。

俺は何度か手にする機会はあるけど其れを持つことは生涯一度も無かった。

力に溺れることを恐れたのだ。

俺は自身が俗物である事を重々承知していたから、

それでも信じていた。

聖剣になど頼らずに己が往く道末を。

だが今は如何でもいいこと。

「ついでにもう一つ訊くがな。お互い初見だしよ、ここらで分けて気はないか？」

「……………」

「悪い話じゃないねえろう？ あそこで惚けているお前のマスターは使い物にならないし、俺のマスターも姿を見せない腰ぬけときた。そして変な奴までいやがる。ここはお互い、万全の状態になるまで勝負を持ち越した方が好ましいんだが——」

変なやつだ、と？ 何処だ？！ あ、俺か。

失礼な発言ではあるが、そこは流そうじゃないか俺は空気読める男。そして、青タイツの言っている事大いに賛成なのだが…。

あつ、衛宮だ。良かった大丈夫そうだな。

「断る。貴方はここで倒れろ、ランサー」

えっ！？ 断るの？！

「そうかよ。ったく、こっちは元々様子見が目的だったんだぜ？ サーヴァントが出たとあっちゃ長居する気は無かったんだが——」

急激に空気が変わった。二人の周囲の空気いや青タイトの周囲が歪む。

そしてランサーと呼ばれた青タイトの姿勢が低くなる。

「宝具！」

騎士風少女は不可視の剣を構え直した。

「……………じゃあな。その心臓、貰い受ける！」

青タイトからとんでもない魔力が噴出し、俺に向けられた物でもないのに背中がゾクリと凍る。手に持つ槍は彼女の足元めがけて繰り出される。

だが、解せない。

と思う同時に体が動き出してしまった。

「sortie jusqu'？」

疾いっ！ が、何故、足元を狙う必要がある？あれでは避けて下さいといってるようなもの。青タイトもといランサーの槍が赤く光り、

「——刺し穿つ（ゲイ）」

案の定、騎士風少女は避けて上から切り伏せようとしている。

まにあええええー！！！！

「
”——
死棘の槍！”
ボルク

下段より放たれた槍は、その軌道を変え少女の心臓に向かっていた。

「チエストオオオオ——！！！」

渾身の魔力を込めて放った航の斬撃波はランサーの放った槍先を捕らえ、

セイバーの本来であれば貫かれるはずの心臓の軌道を逸らす事に成功した。

もつとも彼女の直感でギリギリのところではそれを避けていたのだが、二つが重なったことでセイバーの概念武装を少しばかり傷付ける事で、

事なきを得た。

ただ、セイバーはその衝撃ゆえに後方に大分飛ばされてしまったが。

「呪詛…、いや今のは因果の逆転か」

着地と同時に呟くセイバーに対して

「テムエ……ッ。邪魔したな我が必殺の刺し穿つ死棘の槍^{グレイ・ボルク}を」

かなりの怒りを孕ませた顔のランサー。

両者の中間に位置取り、剣を肩に担いだ男は不敵に笑う。

「いささか無粋な、青いの。女は愛でる者ぞ。真心と情熱を込めて心射止めるといふならば邪魔はせんが、そのまま心臓貫こうとは、我が前では見過ごせん。……セタンタ君？」

「チツ、まずったぜ。今日はここで退かせて貰う」

かなり怒気を秘めながらもランサーは踵を返す。

「逃げるのかランサー！」

セイバーは叫ぶが動けない。

「あいにくマスターの指示でな。追ってくるなら、死ぬ覚悟で来い」

ランサーは去って行った。

だがセイバーは油断なく剣を構えた。

もう一人の剣を持った男に。

「どついう事情かは知りませんが、先ほどの礼は言います。ですが敵であることには変わりません」

不可視の剣を男に向けるセイバー

「ちょっと待ってくれセイバー。月見里は敵じゃないっ!」

「なっ! マスター危険です! 下がってください」

「だから平気だつて! 月見里一体何なんだこれは!」

セイバーを押しつけて出てきた士郎。

「…マス、ター…だと!」

セイバーの放った士郎への言葉で月見里航は愕然とした。

「貴様っ! ハーレムでも作るつもりか!」

心から叫んだ。

「なんでさっ?！」

衛宮士郎は混乱した。

これは求愛ですか？（前書き）

残念な主人公

これは求愛ですか？

おっと余りに衝撃的な展開に我を忘れてしまった。

衛宮の襟首を掴んでシェイクしまくった。

今は反省している。

本当に反省しているんだ。

だから、

「セイバーと言ったか？ 出会ったばかりの男に いきなり跨るとはなかなか情熱的ではないか、だが、その気持ちは嬉しく思う。君の気持ちに応えよう。だから、先ずは私の首元に突きつけているコレを退ける事から始めよう？ そうだな…。子供はフットボールチームが出来る位欲しいから頑張ってくれ（キリッ）」

「——ッ！ 黙りなさいっ！」

おれ、可笑しいな。さっきより風切り音が強くなったぞ？

セイバーさんの手が震えてる？ あ、そうか照れてるんだな。

あれれ、首筋から赤い液体が滲んできたよ。

「衛宮君、助けたまえ」

「なんで偉そうなんだよ。でもセイバー頼む。やめてくれ。月見里は、その……変わっているが、…悪い奴…じゃない…」

何故、最後のほう言い淀んでいるのだ。

「お前っ、命の恩人に対してもっと敬う気持ちはないのか！」

「そ、そっか。セイバーありがとな」

俺にじゃなくて、セイバーと呼ばれる少女に頭を軽く下げる衛宮。

「マスターを守るのはサーヴァントの役目ですから、気に為さらずに」

ちくしょう！ 衛宮めっ！

俺と青タイツとの戦闘での勇姿見ていなかったなっ！

まあこの際仕方ないと、捨て置こう。

この超展開に付いていけないのは衛宮だけじゃない。
話を進めよう。

「その先ほどこら言っている”マスター”と”サーヴァント”とあと”セイバー”や”ランサー”って言うのも解せん。どういう意味なのだ？ 文字通りご主人様とメイドと言っわけでも無さそうだが、衛宮の家に借金の形に売られて来た訳ではあるまい？」

そうであつたなら衛宮君とちょっと”お話し合い”をしなくてはならないが。

「そうだ、きちんと説明してくれセイバー。それから月見里は不用意な言葉が多すぎるから自重してくれ。」

……衛宮君が冷たいです。

「この聖杯戦争を戦う為、貴方によって召喚されたサーヴァントです。さっきも言ったはずでしょうマスター」

なんと！？ では俺も召喚して可愛い女の子ゲットだぜ！ って出来るのか！

ぜひ、召喚の仕方を覚えなくちゃ。

「だ、だから！ その聖杯戦争とかサーヴァントとかって言うのは何なんだよ！」

「…そうか、貴方は本当に何も知らないのですね。——ならばお答えしましょう」

「聖杯戦争それは——」

セイバーの語りだした内容を要約する。

七人の魔術師による殺し合い優勝商品は聖杯で聖杯は何でも叶えてくれる神龍的なもの。

サーヴァントは魔術師の戦い下僕。

……サーヴァントの必要性が分からないんだが。

むっ！？

「セイバー退け」

セイバーも気付いたのか、俺を足蹴にするのを止めた。
相変わらず俺見て警戒はしているが。

「衛宮、新手のようだ」

「新手の気配です。マスター」

「心配するな、衛宮に危害を加えるつもりなどない。もし、そのような素振りがあれば、いつでも俺の命を取るがいい」

「……分かりました、貴殿を信じます。マスター話はあとで」

塀の向こうへ飛び出していくセイバー。

「ちよっ…！ 新手ってまた敵なのか!？」

「衛宮、俺から離れるなよ」

本当は衛宮をここに放置していきたくとこだが絶対付いてくるだろうし。

俺のそばにいれば逃げる時間くらいは稼いでやれるだろう。

と思い直し、俺達も飛び出して行く。

俺たちが飛び出してセイバーに追いついた時、
セイバーは赤い外套の男を斬り伏せる直前だった。

「やめろセイバーーーーー」

衛宮が叫ぶ。

するとセイバーに光が走り剣筋が止まった。

嘘だろ！？ あんな無理な寸止めできるのか？

なにか魔法的なものが発現されたと考えるべきか？

とりあえず”彼女”が無事だったということで良かったとしておう。

「な…ッ」

セイバーが衛宮に振り向く。

この時、俺はアホ毛もありだなと場違いな事を考えていた。スマン。

「なぜ止めるのですマスター！？ 彼らは敵です！ ここで仕留めておかねば……」

「何を今さらー!!」

どちらも正しい。

衛宮はまだ、この聖杯戦争仕組み、概要がきちんと理解できていない。

無論、俺もだが。

急に「勝ち残れば何でも叶えてやるから殺しあえ」っていわれて。

「わかった。僕頑張るよ」とは衛宮の性格じゃ言えないだろ。

逆にセイバーは、

お前の意思なぞ知るか、私は聖杯のために呼ばれた存在なんだ、つべこべ言ってんじゃねーよ。ということになる。

おそらく7人のサーヴァントは龍玉的な役割。

七つそろえて初めて効果を為す。そういう事なのだろう。

では呼ばれたサーヴァントは何のメリットが？

青タイツがゲイボルグって叫んだから、ノリでセタンタ君と言ったが、

叙事詩や神話に出た人物を使い魔になどできるのか？

ゲイ・ボルグ、ケルト神話に出てくる槍だ。

必ず投げた相手の心臓を貫くとされ、神話の半神半人の英雄がもっていたとされる。

まさか本物か？　ありえないだろ。

しかし”因果の逆転”は、因果を捻じ曲げて結果が最優先ということ

そんな魔法聞いたことない。

秘孔を突く前に突いたことにして「お前はすでに死んでいる」って、

なんたるチートぶり。

悪魔召喚や精霊召喚でさえ己が命を代償にするのだ。

そんなチートぶりのサーヴァントを召喚したら、

召喚した直後に命を落として聖杯戦争どころじゃなくなる。

だから到底そんなもの召喚できると思えない。

仮に出来たとしてサーヴァントは何か願いでもあるのか？
じゃなきゃわざわざ龍玉的なものになるとは思えない。

考えても判らない事が多すぎる。

アー、アー、また『前世の常識』で今の事柄を捉えてしまった。
こちらの常識では普通のことなのか？

やはり俺にもきちんとした説明が欲しいところだ。

「お、おまえ！！ 遠坂…！？」

え？ 今さらですか士郎君。

気が付かずに助けたのか、とんだお人よしだ。
俺は俺が助けたい者しか助けない主義なので、
あれが遠坂じゃなかったら助けなかったんじゃないだろうか。
ほんとに衛宮は衛宮であるといえる。

「あのね衛宮君、忠告しておくけど”令呪”は戦いの切り札となるものでしょう？ こんなことで使ってたらあとで苦勞するわよ」

衛宮の手を握りながら遠坂が、また意味深な言葉を紡いだ。

”令呪”ねえ……。直訳すれば命令する呪いって事だろうが。
あんなチート使い魔、素直に命令なんて聞くのか？

「まあそこままでして止めてくれたって訳だし、ここは感謝しとかないといけないわね。
アーチャーちよっと消えてて」

アイツは恋愛主人公体質に違いない！　だが、やらせはせんよ。
ハーレムだけは阻止してやる。

遠坂の言葉に赤い外套を着た男が姿を消した。

「え？　切り札って何のことだ？　…俺、何も使った覚えないぞ。
い、いやそれよりもお前、本当にマスターって奴なのか？」

「…ちよつとアンタ、…まさか令呪のシステムはおるか、聖杯戦争の事すらろくに知らないってんじゃないでしょうね？」

全く仰る通りなんですが、お前が来なきゃもう少し詳しくセイバーが、

説明してくれたと思うんだがね。

あと、言葉遣いが乱れてますよ遠坂さん。

「ど素人が」とか「何だってこんなやつが最良のサーヴァントを…」とか溜息つきながらぶつぶつ言い出した。

が、まあ彼女にも何かありそうだと突っ込まないでおう。

「遠坂、どこへ？」

「中で話しましょう　この戦いのあらましを説明してあげるわ。
それから、月見里君も、ちよつとお話しましょう」

それは助かるが、

「あ、気付いてた？」

何でだろう　お話し　が　違う発音に聞こえたんだが。

トコトコというよりズカズカ衛宮邸に入っていかれる遠坂さん。

「マスター今のところ彼女に害意はないようです。ここは素直に聞いておくべきでしょう。」

「俺も賛成だ。巻き込まれた身としては判らないことが多すぎる。お前は”マスター”とやらなのだから、俺以上に知識をつけておいて損はないはず」

「ああ。…わかった」

衛宮邸に入る前にセイバーに一言。

「なあセイバー」

「何でしょう？」

「その子供は5人でいいや」

「……………」

無視された。

教会は嫌い（前書き）

主人公、真面目に終わる。

教会は嫌い

衛宮邸の居間のガラスが、見事に砕け散って冬の冷たい風が吹き荒む。

寒くて話し合いどころではないと思ったので、

「sculpture de verre merveilleux」

もう遠坂にバレてもいいかと、魔法を使って窓ガラスを修復した。

衛宮と遠坂二人にすごく驚かれた。

ほんと衛宮め俺と青タイツとの戦いをほとんど何も見てなかったんだな。

そんなにセイバーの姿に釘付けか。

「ステンドグラス！？ しかも俺の裸体入り！？」

心とは裏腹に会心の出来映え。

仕事は拘りを持たねばな。

「やめてくれっ！」

「真面目にやれっ！」

二人に怒られた。

ダビデ像張りにかっこ良く作つたのに残念だ。

当社比1.5倍くらいにしてやつたのに非常に残念だ。

何がつてナニですが？

再構築しなきゃダメだろうか？ チラッ

「不満な顔するなっ！！」

衛宮宅の居間で茶を啜りながら説明会突入です。

「おほん、それじゃあいいかしら？　まずは私から。さっきの衛宮君の質問の答えからね。私は聖杯戦争の正式なマスターよ」

正式？　つまり衛宮は不正式、イレギュラーということか？
まあ本人も全くわかってなかったしな。

「そして貴方と同じ魔術師でもある　…衛宮君は知らなかったみたいだけどね」

え、衛宮、魔法師だったのか……。

いや魔術師か？　呼び方が違うとだけ今は解釈しとくか。

しかし、魔力隠蔽もうまくないし、てか、してるつもりだったのか？
一般人と変わらない程度しか感じないんだが…才能あまりないのか…。

それでも、セイバーを召喚したんだから潜在的にはあるのか？
今後に期待つてところなのだろうか。判断に悩むなあ。

「だってお前、学園じゃ誰から見ても優等生で男子にとっちゃアイドルみたいな存在で……」

急に何言ってるの？　それって遠まわしな告白？

「あら、衛宮くんもそういう風に思ってくれてたわけ？」

「いや、それは」

コイツも初心よのお。なんと分かり易い…。

「魔術師は正体を隠すものだもの。衛宮君も魔術師だって事、隠しているでしょ？」

やはりそうなるのか。こつちの世界では魔法いや魔術か、めんどくせえな魔術でいいや…。は禁忌にあたるのか。

「えっ、知ってたのか？」

「なにセマスターっていうのは魔術師にしかないものよ。まあ、それでも衛宮君の場合は何かの事故だったんだろうけど。まさか貴方がマスターだなんてこつちも驚きだわ」

なんで、俺を見る？

「で、今度は貴方のことおしえてくれるかしら？ 月見里君」

「ああ、俺の事は追々でいいだろ。ちよつと二人だけで話したいこともある。それより令呪だとかサーヴァントが何か、セイバーとかランサーとかの説明を先にしてくれないか？」

「そ、じゃああとで詳しく話して頂戴。じゃあ令呪についてだけど…」

ちょっと笑顔が怖いんですが……。

令呪――

それは聖杯戦争のマスターに与えられる。

令呪持ち〃聖杯戦争に参加しているマスターといえる。

衛宮の手の甲にあるあの刺青みたいな奴か。

サーヴァントに対して3回限りの絶対命令を下せる。

遠坂にセイバーが斬りかかった時に発生したアレか。

……なるほどなるほど。

これがあるからチートなサーヴァントを縛っておけると。

「令呪の事は把握した。衛宮も大丈夫か？」

「ああ、問題ない」

「じゃあ、サーヴァントとセイバーとかランサーというのは？」

「過去の英雄達の魂よ、セイバーやライダーは割り当てられたクラス」

「英雄ってアレか、昔話に出てくる……」

「そう神話や伝説…数えればキリがないわね。生前の偉業により英雄と認められた者は死後、『英雄の座』に迎えられる――」

過去の英雄といったが、確かに叙事詩、伝承、物語なにかしら文献残ってるとしても

実在していた確証は無い。だがそこは問題ではないらしい。

どれだけ知名度があるか、崇められてる対象かということらしい。

頭痛くなってきた。

たとえば、漫画の主人公がずっと語り継がれ神聖視されれば、英雄の座に迎えられると言うことか？

「オッス！ オラ。空、オメエかあオラを召喚したんわあ」

思わず米神を押さえた俺は悪くない。

「ただでさえ、英霊の召喚なんて――」

聖杯はそれらに7つのクラスに当てはめることで召喚を可能にした。
セイバー ランサー アーチャー ライダー
剣使い 槍使い 弓使い 騎乗兵
アサシン キャスター バースカー サイヤ
暗殺者 魔法使い 狂戦士 野菜人

別に全員が剣使いでもいい気がするが……。

アレかジャンケンの要素を取り入れたみたいな感じか。

全員が”グー”ばかりじゃ決着つかないから”チョキ”と”パー”も使おうぜ。

って事か。

だあーもうそれで納得しとこ。

あと真名隠すためっていう理由も一応あると。

。空が力カ■ツトってことだな、いや違うか。

真名がばれると弱点もわかってしまうから。

そして聖杯が呼んだクラスの英雄を各マスターが召喚と。
ランダムっぽい言い方してたが、何か裏がありそうだな。

で、そいつ等使って戦って勝ち残ったら聖杯あげると。

ほかに色々あったが胡散臭すぎる。

「前回の聖杯戦争——」とか「聖杯は御三家が——」とか

「聖杯は便宜上そう呼んでるだけ」とか、もう面倒だから聞き流そう。

大体、俺マスターじゃないしな。

「——これが聖杯戦争のあらましよ」

「遠坂、一つだけ質問がある」

もう空腹だが、おなか一杯。でも一つだけ聴きたいことがある。

「なにかしら？」

「宝具ってのはサーヴァントが持つ武器と解釈していいのか？」

セイバーやランサーがお互いに向かって言ってたヤツだ。

「ええ、大体あってるわ。付け加えるなら武装であり、象徴であり、奥の手。」

英雄とは宝具とセットでこそ英雄なの。だからそれには凄い力が秘められてる」

なるほど。セタンタにゲイ・ボルグ。

「ジミヘンのギター然り、呂布の方天画戟然り、スークの無限バンダナ然りということか」

サーヴァント、チートすぎだろ。

でもランサーがゲイ・ボルグ使ったから正体がわかったってことになる。

デメリットもあるということか？

「お前の例え、統一性が無いな……」

余計なお世話です。

「悪い、もう一つ質問だ。宝具使うときは詠唱のようなものは絶対いるのか？」

「ええ、宝具の真名が開放されて宝具の力が最大限発揮できるわけだから、ここぞという時に使うことが常識ね」

宝具の名前が判れば持ち主の名前も判ると。

必殺技は必殺ゆえに必殺技か……。

防がれると手痛いカウンターが待っている。

いやしかし、弱点がばれた所で弱点なりうるのか？

有名どころでいけばオーデイン、彼の弱点といえば自分自身の武器である

グングニールもしくは最後食い殺されたフェンリルということになる。

……どうやって用意するの？

「わかった、さんきゅ」

あえて簡単そうなルールに見えて実は色々な縛りと制約があり、考えると複雑。

何かを隠すため表向き、そうなってるように見せて、裏があるとは思わせようになっているのではないか？

……もう、なんだ疲れた。

「とにかく衛宮君はその聖杯戦争に巻き込まれたわけよ。さあこれから行く所があるからついてきて」

「俺はまだ納得してない！」

衛宮が遠坂に突っかかっているが、

「俺腹減ったんだけど、飯が出ないなら帰っていいか？」

部外者とは言わないがマスターじゃないし。
後はお二人、いや三人でやっとなれ。

「その前に月見里」

「なんだ衛宮？」

「ランサーに襲われたとき、どうしてうちにいたんだ？」

「おまつ、それ言っちゃう！？ ご飯貰いに着たらお前が窓から飛び出してくるし、変な奴に追われてるし、俺だって訳わからなかったのにお前が危ないと思って助けに入って、槍で突かれ捲るし、そしたらいきなり現れたセイバーに後ろから吹っ飛ばされるし、拳句の果てにセイバーのピンチに、吹っ飛ばされたにも拘らず、助けに入った俺にそれ言っちゃう！？」

「ああ、うん。なんかスマン」

「ちよつと待ちなさい！ アンタ、サーヴァントとやりあったの！？」

「ちよつとだけな。ランサーって奴も油断してたし、すぐセイバ―が出てきたし、俺もそんなヤバイ相手だとは知らなかったんだ。いやはや無知とは時として恐ろしいな」

あんな宝具使われてたら今頃あの世だ、それともまた別の世界に転生か？

もし、今後戦うことがあるならその辺、頭入れとかないとな。
あと俺の説明もそのうちしなきゃならん。どこまで話すかだな。

「…呆れた。でも、月見里君が衛宮君の家に居た訳はわかったわ。そういうことなら貴方も着いて来なさい」

「なんで？」

「今から行くところは聖杯戦争を監督している奴のところ。そこではサーヴァントを無くしたマスターの保護なんかもしているわ。貴方はマスターじゃないけど保護してもらいなさい」

そういうことか。

俺も、どのマスターか知らないが、狙われる可能性もあるというところか。

「だが、断る！」

べ、別に、これが言いたかったからじゃないんだからね！

「貴方、死にたいの!？」

「…下天のうちにくらぶれば、夢幻の如くなり。一度生を享け滅せぬもののあるべきか。俺は俺自身で道を決める。だから断る」

これが俺の座右の銘だ。

人は何時しか死ぬ、それが早いか、遅いかの違いだけ。

別に死に急ぐ訳ではないが、保護してもらってまで生きたいと思わん。

なら、俺は俺のやりたいように生きて死ぬだけ。

その過程で死ぬことがあってもそれが俺の人生だったということだ。

「……………」

「……………」

「……………」

え、なんで皆そんな顔で俺見てるの？

そんなに変な事いつたか？

あつ真顔でそんな恥ずかしいこと口にすんなと？ 厨二、乙って事？

………… 恥ずかしいんですが。

「まあ、しかし監督役の顔を見ておくのも悪くないだろうから付いて行こう」

話題を転換して。この白けた空気を払拭しよう。

「そ、そう。じゃあ行きましょう」

真冬の夜の静寂は心安らぐ、夜空に広がる星がとても綺麗だと思わないか？

その静寂を切り裂くように救急車のサイレンが過ぎ去っていったが、ここ最近サイレン音を頻繁に聞く。

テレビじゃ新都のほうで欠陥建築のせいでガス漏れが相次いでるとか。

こりゃあ、今回の件と関係ありそうだな。

俺たちは監督役のいるところへ向かっているわけだが。

「借りをつくったままじゃ嫌、勘違いしないでよね」とツンデレってたり

「戦う戦わないは貴方の自由だけど次ぎ会ったら敵よ」とかヤンデレったり

ヤンデレは違うか、

それでも面倒見てるんだからコイツもお人好しだな。

兎も角、

空気が悪くなったので和ませてたろう。

「おい、ポンコツ。ひとつ貸しだからな。礼は令呪でセイバーをおれの嫁にするか、帰ったら飯食わせるかにしろ」

「ポンコツって言うな！俺だって頑張ってるんだ！あとドサ

クサに紛れて何言ってるんだお前！」

監督役のところへ行く時、問題が起きた。

通常サーヴァントは霊体化できるらしいのだが、

衛宮とセイバーは”パス”という繋がりがうまくいってないそうだ。

遠坂の赤いあの男も霊体化していて今もその辺漂っているのだからか。

まあそんなわけで、セイバーさんは霊体化できないので、

鎧着たまま連れ出すことになったのだが、目立つからといって

何を考えてんだか黄色い雨合羽着せやがった。

そのセンスに脱帽だ。余計目立つわ！

あまりに不憫なその姿を見て、衛宮にもう着ない服を何着か出させて
鍊金魔法でコートを作ってあげたわけだ。

「令呪の一つや二つでちいせえ事言うなよ。減るもんじゃねえだ
ろ？」

「減るし！ 小さいことじゃないっ！」

鍊金あんまり得意じゃないんだが遠坂の着ている赤いコートを
参考にしたからそこまで変じゃないハズ。ちなみに色は藍色。

「セイバーも雨合羽着せるマスターよりいいだろう？ いつでも
俺の胸へ飛び込んで来い」

「なっ？！ 貴方は私を馬鹿にしているのですか！ 私は騎士で
す！ マスターの剣と盾になる身。主を違えることはありません！」

「主じゃなくて伴侶な？ あ、俺のことは航と呼んでくれていい
ぞ」

「そ、そういう問題ではありません！」

「やめろよ、月見里。セイバーが嫌がってるだろ」

「はあゝ。貴方達ほんとに自分の置かれてる立場わかってるの？
さあ着いたわよ。ここが監督役の神父がいる言峰教会」

遠坂が呆れながら指差す先には確かに教会があつた。
うわっ、ダメだここ気色悪いわ。

「マスター、私はここで外敵に備えます。 良くない空気です。
貴方も決して油断しないように」

「俺もここで待ってるわ」

俺もセイバーに便乗しよう。
今すぐにでもこの教会を跡形もなく消し飛ばしたい衝動に駆られる
のだ。

監督役のその神父をみたら、如何にかなりそうだ。

「はあゝ。わかったわよ。行きましよう衛宮君」

どうやら俺の「行きたくない」という頑なな意思を感じ取ってくれ
たらしい。

衛宮と遠坂が教会へ消えていった。

「気持ち悪いところだな？ ラスボスとか出てきそうだ」

死臭が漂ってくるぜ。

教会の近くに墓があるんだから間違っではないんだが、もっと生々しいというか、神の家なんて馬鹿馬鹿しい感覚。

「…貴方は前回の聖杯戦争のことを何か…知っているのですか？それよりサーヴァントと渡り合えると言うのも気になりますか？…」

「航だ。ワ・タ・ル。その堅苦しい喋り方如何にかならないのか？」

「喋り方はどうにもなりません…ワタル」

お、一歩前進か。

「ああ、そう。まあいいけど。…前回の戦争のことは衛宮の家で聞いたことしか知らない。まあ新都の方にあるだっ広い公園の訳は理解できたし、おそらく前回もこの教会が何か絡んでたろうくらいは推測できるがな」

俺はこの街にやってきたのは7年前だからな。父上が家建てるために引っ越してきたのだ。

「見た目によらず、なかなかの洞察力なのですね」

ソレ褒めてるのか。だが君、前回も聖杯戦争に参加してたのか？まあ俺にはどうでもいいことか。

「お褒めに預かり光栄だ。サーヴァントのほうは何でだろうな？よく分らないけど…。最近、超絶に力が上がったって感じた。俺

も何らかの理由で聖杯の恩恵？ 預かったのかもな。そう考えるしかないな」

まあ他にも色々あるけど嘘は言っていないし、こんなもんでいいだろ。

「……そうですか」

「ああ。…それよりだ。衛宮のこと宜しく頼むな。アイツは納得できないだとか、なんだかんだ言ってたが、きつとこの戦争に参加する」

他の悪意をもつマスターやサーヴァントを見過ごせないとか言ったださ。

「お前のマスターは甘ったれの半人前だが、真っ直ぐな奴なんだ。だから頼むな？」

「当然です。…ですが、ワタルのことを誤解していました。…マスターは良い友をお持ちのようです」

こんな表情も出来るんだと、その柔らかな微笑に目を奪われた。

アレは化け物です（前書き）

視点変更多し

主人公頑張る

アレは化け物です

何がいけなかったのかは分ってる。

「俺、この戦いが終わったらあの子にプロポーズするんだ」

不用意の一言が招いたといえ、あんまりじゃないか。

きつとこの世界の神は俺が嫌いなんだ。

俺もアンタが嫌いだ。

だから、これが終わったら天に向けて中指突き立ててやる。

教会から出てきた衛宮と遠坂。

士郎に駆け寄るセイバー。少し顔色がよろしくないが、中で何かあったのだろうか？

「大丈夫だ」

何かあったな。しかし何か決意も固めてきたみたいだ。

「セイバー」

「はい」

「俺はこの戦いを見過ごせない。だからマスターになる」

「はい」

「ちょっと頼りないマスターかもしれないけど、これからよろしく頼む」

「はい。シロウ」

握手を交わすセイバーと衛宮。

おおおう。俺があげた好感度が一瞬で飛んだ……。

恐るべし！ 恋愛主人公体質！

「それじゃあ帰りましょう」

遠坂の声で町まで戻るため歩き始める。

ようやく長い一日が終わる。

今日は色々あったな。柳洞寺の倅にかかった暗示的なもの上書きし

たり、

学校に仕掛けられてた結界に嫌がらせして、家帰って使い魔召喚したら、

愛剣がててきたり、青タイツに槍で突きまくられたり

「せめて自陣に戻るまでは気を抜いてはいけません」

「そうか、わかった。セイバーがしっかりしてくれて助かる俺は魔術師として半人前だし聖杯戦争の事も分らないことばかりだ」

セイバーに吹っ飛ばされたり、

「お前が味方で良かった。……頼りにしてるよセイバー」

「はいっ」

ああ、夜空が浮かぶ月が綺麗だなあ。

「俺、この戦いが終わったらあの子にプロポーズするんだ」

……相手いないけどな。 なんかこう主人と従者のいい雰囲気見ると……ね？

ああほんと夜空が綺麗だ。

「そう。好きにきなさい」

遠坂の突っ込み。

「こら、心の声にツッコミいれるな」

「貴方、口に出していたわよ」

「そうか…。聞かなかったことにしてくれ。後、俺について色々聞きたいことあるだろうが明日でいいか？今日はもう疲れた」

「ええ、そうね。それでいいわ。じゃあここで別れましょう」

「だな、腹減った」

「衛宮君わかってると思うけど、これで貸し借りなし。次ぎ会うときは敵同士よ」

「無論です。こちらも手加減しません」

士郎に代わって答えるセイバー。

…遠坂。

敵だ敵だと何度か衛宮に言ってるけど自分に言い聞かせてるんだろ
うな。

非情になれるなら最初から助けなきゃいいのだ。

優しいんだな。

「ちよつと何ニヤニヤしてるのよ！ 月見里君」

「いや、なんでもないよ」

頬の筋肉が緩んでいたらしい。

「なによ、衛宮君まで？」

「ああ、お前のおかげで助かったよ。ありがとう。遠坂はいいヤツだな。俺お前みたいなヤツ好きだ」

ああ、衛宮に殺意が沸いてくるぜ……。

一級フラグ建築士郎の名をお前に送ろう。

「…なっ！？ ちょっとわかつてのアンタ！？ 私たちは敵同士で…」

「？ わかってるさ、だけど世話になったんだ礼を言うのは当然だろ」

衛宮らしい答えだけどき、まさに天然ジゴロ。

「…もういいわ。せめて早死にしないように気をつけるのね」

「———ねえ、お話は終わり？」

冬空に響くその透き通った声は美しく幼い。

声を追って視線を向ければ、坂の上。

色で表すなら白。淡く儂いその少女。

そしてその存在と似つかわしくない化け物。

何がいけなかったのかは分ってる。

——俺、この戦いが終わったらあの子にプロポーズするんだ

だって死亡フラグだもの。　わたる

「バーサーカー」

あんな化け物が近付くまで気付けないとは……。

アレもサーヴァントか、霊体化してやがったな。

目測　身長2m半、体重300Kg超　の上半身裸の大男

ありゃ、ヤバイ。青タイツ以上にヤバイ。その存在に理性などなく
狂気に満ちている。

あいつのクラスなら一般人でもわかる。

「こんばんはお兄ちゃん。こうして会うのは二度目だね」

無邪気に微笑む少女。

衛宮お前ってヤツは…あんな少女にまで…。

「知り合いか衛宮？」

出来れば友好的な知り合いだと信じたい。

「いや、こないだ道ですれ違った程度？」

「おまつ、どんなフラグたてやがった！」

こんな事言ってるけど余裕ありませんから！

「——驚いた。単純な能力だけならセイバー以上じゃない、アレ」

鉛色の巨躯、理性の宿らない紅い瞳。

見てるだけで圧倒される。

「アーチャー、アレは力押しでなんとかなる相手じゃない。ここは貴方本来の戦い方に徹するべきよ」

呟く声。それに、姿のない何かが応答する。

ああ赤い外套の男か。

「君がそう言うなら了解するが……凜ではアレの突進は防げまい」

「それでもやらなきゃならないのよ」

全く、コイツもほんとお人好しだ。衛宮と変わらないんじゃないか。

「——衛宮くん、月見里君。逃げるか戦うかは貴方たちの自由よ。……けど、出来るならなんとか逃げなさい」

俺たちを逃がそうってんだから。

「相談は済んだ？　なら、始めちゃっていい？」

なんでもない世間話をするような少女の声。

少女は行儀良くスカートの裾を持ち上げて、お辞儀をする。
なんと場違いか。

「はじめまして、リン。わたしはイリヤ。イリヤスフィール・フォン・アインツベルンって言えばわかるでしょ？」

「アインツベルン——」

面識はなくとも知り合いのようだ。

ちよいと震えてるじゃないか。対して少女はその態度に満足そうに
笑い

「——じゃあ殺すね。やっちゃえ、バーサーカー」

バーサーカーと呼ばれたモノが、坂の上からここまで、何十メートルという距離を一息で落下してくる——！

「——シロウ、下がって……！」

月の下。

流星じみた何条もの“弾丸”が、落下してくる鉛色の巨軀をつるべ
打ちにする……！

その一撃一撃は岩盤すら容易く穿ち貫くだろう矢。

その光景をサーヴァントって馬鹿げてるなぁと眺めてた。

「うそ、効いていない——!?」

遠坂の驚愕。

鉛色の巨人には、何の効果も得ることはなかったらしい。

「…Ouvrez」

落下地点まで走り寄ったセイバーがバーサーカーの大剣に剣をぶつける。

さて、出遅れたが、やる事は決まった。

セイバーが凌いでいるうちにマスターを倒してしまおう。

「おい衛宮！ 間違ってもセイバーを助けようなどと思つな」

「え、あ、おい！ お前こそ何処行くんだった!?」

衛宮の声を無視して愛剣と共に走り出した。

これは何の冗談だろう？

サーヴァント同士の戦い。

初めて見た時、私はただ立ち尽くすのみだった。

今、目の前のそれも人智をはるかに超えている英雄達の戦い。

気を抜けば魅入ってしまいそう。

理性をカットして戦闘に特化したバーサーカー。

本来、バーサーカーは能力的に劣るものになるもの。

あれは元より”下地”が別格。

対するセイバーもその猛攻を捌いている。

タイミング、スピード少しでも間違えれば即、死に至る攻撃を――。

白兵戦最強といわれるサーヴァントだけある。

そんな中に異物が飛び込んでいるのだ。

はつきり言つて自分の正気を疑う。

「チツ、やっぱ抜けねえ」

おそらく最初に狙ったのはバーサーカーのマスター。

人間には遠く及ばない存在のサーヴァント。

勝てないなら、同じ人間のマスターを倒す。

聖杯戦争では基本といえる。正しくそれは正しい。

だけど、バーサーカーがマスターの危機を感じ取ったのか、
相手取っていたセイバーを強引に振り切り、
マスターへ向かう敵を排除しようと巨大な岩の剣を振り下ろす。

…普通の人間ではここで終わっている。

——それを避けたのだ。

そればかりかお返しとばかりに、強烈な魔力を孕んだ攻撃を三度加えて見せた。

さすがにこの攻撃にバーサーカーも仰け反り、そこにセイバーがさらに一撃。

どれもバーサーカーに大したダメージを与えていないが、

——それでも渡り合っているのだ。

ただのクラスメイトが、ましてやマスターでも魔術師だとも思っていないかった奴が。

——月見里 航

クラスメイトであり、おなじクラスになって間もない頃、突然告白して抱きしめてきた変人。

返事を聞く前に抱きしめるって何考えてんだか。思わず叩きのめした私は悪くない。

ただ、これまで完璧を通してきた学園生活の事を考えたら溜息つきたくなった。

だけどその後、本当に何も無かったかのように振る舞い。普通に挨拶も交わすし、日常的な会話もする。

意外といいヤツなんだ。

とか思ってたけど、やっぱり色々変な奴だった。

男子達を言葉巧みに操り、煽り立て暴走させる。

その数や両手で数え切れない。

女子は女子で恋愛相談をしている。

相談する相手間違ってると思うけど。

曰く、「彼の占いはけっこう当たる」だそうだ。

彼が悪の組織の黒幕や新興宗教の教祖とかやったらと思うとゾッとする。

一度、何でわざわざ、そんな馬鹿な事ばかりするのか聞いてみたことがある。

「自分が楽しい人生じゃなきゃ生きてても、つまらないだろ？」

なら 自分の楽しい を皆に押し付ける、そこに他人の意見や意思なんか

関係ないと思うんだ。うん」

夕暮れの教室で満面の笑顔を浮かべたソイツ。

なんて自分勝手なと思う反面、

私とは対極の位置にいてっただけ羨ましいと思った男子。

そうただ、ちょっと変わってて眩しいと思った奴が――

「遠坂っ！ アーチャーに援護させろ！ こっちは勝手に避ける！」

「わかったわ！ アーチャー！」

「承知した」

視認できるほどの強大な魔力、その魔力の奔流を身に纏って。それはまるで神話から出てきた英雄そのもの。

——戦っているのだ。

「ちょっと衛宮君！ 逃げるわよ」

「あいつら置いて逃げるなんてできるわけないだろ！」

「バカ！？ わからないの私たちがここにおいても足手まといなだけなの」

あいつ等は離れたか？

飛来してきた幾重の光の筋。

セイバーと共に左右に分かれて避ける。

こっちで避けるとは言ったはものの冷や汗が止まらない。

「ヴウウオオオオオオ——！！」

光の筋は寸分たがわずバーサーカーに命中して爆ぜる。ほんと容赦ないな。

……効いてないみたいだが。

「セイバーよ、無理を承知でアレをしばし足止めできぬか？」

アレはいつか狩った竜より性質が悪い。

「貴方は？」

さすが剣使いセイバーと言われるだけあって、超一流の剣士。

即席とは思えない連携。

長年の戦友に背中預けているような安心感。

だが、いかんせんお互いの事を知らなすぎる。

コレ相手に長くは続けられないだろう。

「今一度、アレのマスターを狙う」

こんな馬鹿げた存在いつまでも相手にしてられない。
狙うは大将首。

それに遠坂や衛宮もいる。守るには、

「攻撃は最大の防御也、よ」

「わかりました。引き付けます」

再び、バーサーカーへと駆ける。

ああ、懐かしき戦いの日々よ。

俺は今度も生き抜いて見せよう。

「はやくそんな奴ら倒しちゃえバーサーカー！」

少女は最早、余裕がなかった。

自身の最強のバーサーカーが攻めあぐねているのだ。

セイバー、アーチャー、そして謎の男。

セイバー以上の魔力放出を持つて戦うその姿。

バーサーカーと斬り渡るたびに紫電が走っているデタラメだ。

そして何より最初に向けられたあの殺気。

少女がここに来る以前、冬の森で向けられた獣とは違う。

明確に、ただ殺す、と。

そして今もまだ、バーサーカーを掻い潜り自分を殺そうとやっている。

バーサーカーも、さすがにバーサーカーが強いとは言え、サーヴァントを同時に3体相手取るのは容易な事ではなかった（一人は人間だが）。

隙あらば己がマスターを殺しに行こうという奴がいるのだ早々、マスターとの距離をおく訳にもいかないと。

——本気で理解した。

そしてこの目の前の敵を沈黙させるには己が命を差し出さねばならないとも。

セイバーも頑張って引き付けてくれたが、やはりダメだった。

見捨てれば或いは……。

ただそれが出来なかったのだ。

自分もまだまだ甘いと痛感。

いやこの世界に生まれて来て変わったと言っべきか。

それでもチャンスがやってきた。

バーサーカーが放った横殴りの攻撃をセイバーが下、俺が上に回避し、

セイバーはバーサーカーの足を切り裂いた。

体制が崩れる鉛色の巨体。

そこに――好機――！！

――獲った――！！

バーサーカーの首が舞う。

「ワタル！ 後ろです！」

が、セイバーの声で後ろを振り返れば、

「こやつ不死身か！？ がはっ！」

首のない状態で振るわれた一撃を喰らい、幾度もアスファルトに叩きつけられる。

漸く止まったか…。

霞む視界。

内臓が捏ね繰り回されたような嘔吐感。

口の中が切れたか、鉄の味が広がる。

ブースト全開でかけてるのに、この威力。

「ちょ、ちょっとしかつりして！ 大丈夫っ！ 月見里君！」

随分と遠くまで転がってきたようだ。外人墓地か。

目の前には美少女が心配そうに俺を見つめている。

遠坂が心配しているのだ。

…美少女に心配されるたあ嬉しいねえ。だが、余韻に浸ってる暇はない

頭を軽く振り上半身を起こす。

「なっ!？」

バーサーカーの首が戻ってる!

「確かに獲った筈…」

「ええ、再生したわ」

そんなヤツにどうやって勝てと?

いや待て、奴はセイバーにかかりきり、
なら今が好機、マスターを倒す!

「じゃ、一寸行ってくる。…ってあら?」

足に力が入らず、と尻餅ついてしまった。

体に力がはいらねえ! 魔力もけっこう使ったな。

あの一撃耐えるためにブーストかなり強化してみたいだ。

アスファルトが所々、抉れているな。

道路作った人ごめんなさい。

「そうなって当然よ、それでもその程度ですんで良かった方よ。というよりあそこまで、やれてた事自体馬鹿げてるの！」

そうですか、でも、そうするとセイバーは？

……押されている。

「そうよ。バーサーカーには勝てっこない。

アイツは古代ギリシャ最大の英雄ヘラクレスなんだから」

白い少女がテンパってか余裕を取り戻してかしらないが、自分のサーヴァントの正体バラした。

それがわかった所で何ともならないが。

「助けねば、セイバーは倒れるか……」

今も押し込まれてアスファルトをこっちに向かって滑ってきた。

「何馬鹿なこと言ってるのよ！ 今度こそ死ぬわよアンタ」

俺を常識で括ってくれるな。

エネルギーゲージは通常の三倍あるのだ。

嘘だけ。

「遠坂よ、衛宮を殴ってでも押し留めておけ」

今にも飛び出していきそうだ。

「アンタ死ぬ気！」

「心配せずとも死ぬ気などないわ。なに、飛び道具を一つくれてやろうと」

思っただけよ」

遠方射撃しているアーチャーもなんか企んでそんな雰囲気あるしな。

魔力を全身に巡らせる。もうちょっとだけ頑張ってくれ俺の体。

「さあ、第二戦と参ろうか」

ダメだ――

遠坂達の攻撃は弾かれてる。

セイバーの攻撃も効かない。

一度、倒したのに――

月見里はもう戦えない。

アイツにはもう何やっても効きやしない。

「がっ…はッ」

「セイバーッ！！」

もうやめろ、お前このままじゃ本当に死んじゃう！！

俺には何もできないのか！

剣を地面に突きたて膝を付くセイバー。

その姿を目にした時、俺の理性は木っ端微塵に砕け散った。

「セイバーっ！ 衛宮を抱えて後ろに飛べッ！！」

アホ衛宮！ やっぱり飛び出してきやがった。

空気を切り裂く轟っという音と共にアーチャーから放たれたナニカ。

それに合わせて残りの魔力を全部込めた俺の最大の一撃。

名をつけるなら『超音速衝撃波』とでも付けようか。

先に謝っとく。かなり吹っ飛ばされると思うからスマン。

衛宮セイバーが退き、図らずとも十字砲火の用を成し、次の瞬間

――閃光

――爆発

――真白

――無音

――そして熱風

体力も魔力もほとんどスツカラカンの俺は為す巢でなく吹き飛ばされた。

どうだ？ これで？

爆心地染みたそこに、それでもソレは立っていた。

いや、上半身は吹き飛ばした。

だが地面に生えた下半身から再生しているのだ。

モウ、オワタ としか言いようがない。

「見直したわりん。やるじゃない、アナタのアーチャー。フッフ、今日はこれで終わりにしてあげる」

何処からか少女の声が聞こえる。
なんと?! そういうことなら早々にお引取り願いたい!

「そう、どういうわけかしら?」

別に理由なんてどうでもいいと思う。いま彼女の機嫌を損ねてはいけない。
空気呼んで遠坂さん。

「貴方達に敬意を表したの。わたしのヘラクレスを3回も殺したんだもの」

じゃあ早く帰ってください。

「それじゃあまたねお兄ちゃん。それからそっちのお兄ちゃんもはいさようなら。」

どこにいるか知らないが手を振るシッシッあっちいけと。

そしてバーサーカーの気配が消えた。

「シロウ! しっかり——」

「衛宮君、今抜くわ」

「おお！ 痛い！ もっとそつと抜いてくれよ」

衛宮君の背中に石の破片が突き刺さってる痛そうだね。

アレ俺かアーチャーの一撃で吹っ飛んだ破片だろうなあ。

でもアレだけ喋れてるなら大丈夫だな。

…さて、俺を心配して誰か来てくれるだろうか。

「大丈夫か？ 少年」

お前かよ！

とりあえず、夜空に向けて中指を立て意識を手放した。

アレは化け物です（後書き）

戦闘描写は難しい

ワタル、ステータス（前書き）

のぞく危険 厨二成分過多

ワタル、ステータス

■月見里航（ヤ・マナシワ・タル 伊 1789）1877
嘘）

クラス：ジョーカー（適当）

真名：月見里航（ヤ・マナシワ・タル 伊 1789）
1877 嘘）

性別：男性 身長・体重：178？ 69？

属性：混沌・善

特技：破壊すべき深刻な有様
シリアスフレイカー

■能力値

筋力 B 魔力 A

耐久 C 幸運 C+

俊敏 B 宝具 B

聖杯戦争により何故か各ステータス、1ランクアップ中。

また、転生者のためスキル（真）は全て（偽）に生まれ持った才能になった。

■クラススキル

対魔力：C

第二節以下の魔術は無効化する。大魔術や儀式呪法などを防ぐことはできない。

聖杯戦争前はDであったが何故か戦争開始時ランクアップしている。

単独行動：A＋

マスター不在でも行動できる能力。

転生し受肉しており、凜の魔術師の眼を持っても“人間”と断じられた。

当たり前だ。

■保有スキル

不退転

何事にも屈しない強い信念。

威圧・混乱・幻惑といった精神干渉、魔眼などの能力低下

“重圧”によるものを軽減する能力。

行動不能にならないだけであって勇猛のような無効化はできない。

心眼（偽）：B

直感・第六感による危険回避。

転生者のためスキル（真）は全て（偽）に生まれ持った才能になった。

真眼（偽）：A

魔力を発するもの、痕跡などを感じ取る力。

要は人間魔力針。本人曰く俺って超敏感体質なのさ。

魔術：B

オーソドックスな魔術を行使可能。

占星術や付加魔術などが得意なようです。

魔力放出：A

身体や武器に魔力を纏わせて強化して戦う技能。
本人曰くブースト魔法。

カリスマ：C

軍団を指揮する天性の才能。団体戦闘において、自軍の能力を向上させる。

カリスマは稀有な才能で、小国の王としてはCランクで十分と言える。

よくクラスメイトを煽って暴走させている。

■宝具

『銘も無き王の剣』
バデナンス・イビロイ

ランク：B 種別：対人宝具 レンジ：1～2 最大捕捉：1人

飾り気の無い両手剣。但し両手剣の中では小振りな方。片手でも使用可。

精霊に貰ったとか、岩に突き刺さっていたとか、天から降りてきたなどの逸話はない。

只の両手剣である。この世界だとクレイモアと呼ばれる種類。

ただし、持ち主が生涯において色々この剣で斬った事で竜殺しなどの能力も持つ。

『前世の世界』で叙事詩や物語として継承され宝具として昇華した。

■解説

こことは違う、何処か別の世界に生まれた英雄。

平民から小国の王に成り上がり、その波瀾万丈な生涯を閉じた。

彼の死後も偉業を称えた、叙事詩や御伽話が語り継がれているらしい。

どういうわけか転生し、現在に至る。

聖杯から能力アップの恩恵を受けているようだが、サーヴァントとして登録されてはいない。

決闘？いえ喧嘩です（前書き）

アーチャー　ちよい壊れ

士郎、起きない

ワタル　やらかす

決闘？いえ喧嘩です

朝、起きると知らない天井だった。

「……生きてて良かった」

この純和風テイストの部屋、間違っても遠坂の家じゃないだろう。ということは衛宮邸だな。

体ダルツ……。魔力が全然回復してないな。
昨日アレだけ酷使したんだコレくらいで済んで良かったと考えるべきか。

今生で間違いなく一番使った。

重い体を引き摺りながら、居間を目指す。
しかし何だ、あいかわらず馬鹿広いなあこの日本家屋は、
うちの父上が見たら発狂しそうだ。

「誰も、居なス」

当たり前か、まだ早朝に加え昨日アレだけの事があったんだ。
さて昨日の昼からろくに何も食べてない、

衛宮には悪いが勝手に何か食わせてもらおう。

まあ俺も一応一人暮らしだし、家事も一通りできる。

衛宮さんの家の台所を漁る。

冷蔵庫には、なんだよ昨日の残りとかないのか？

しかし整理されてるなあ。まあそれでもすぐ食えるものはない。

ご飯はちよつと残ってる。

卵があつた。

後、醤油。

もう、わかるよな？

自分で作らないのかつて？ 作りませんよ面倒なもの。

「いただきます」

勝手知つたる他人家の勝手 読み人知らず わたる

くだらない事を考えながら卵かけご飯を胃に収めていく。

「足りない」

仕方ないコンビニで何か買って来るか。

え？ 作りませんよ。面倒なもの。

それじゃあ、お財布もつて（なぜか居間のテーブルに放置）

おおおう財布がボロボロだ。

というかコレ俺の服じゃないな、まあいいや出かけよ。

誰が着替えさせたとか考えたら負け。

衛宮さん家の玄関開けたら視線を感じる。
それもけっこう鋭い。

「このプレスシャー、…アーチャーか!？」

「ほう、気付いたか少年」

いつの間にか赤い外套着た褐色白銀頭の男が立っていた。

「早いなアーチャー。早朝ランニングでもしてきたか？」

「……君は少々、思考が他人とはズレているといわれないか？」

腕組んで溜息ついているんだがコイツ。

朝からコンビ二前のヤンキーの如くめんち切ってくる奴に言われたくないが。

「まあよく言われるが。で、何か用か？」

「なに、こんな早く家から出て行こうというのだ、声ぐらいかけておこうかと思ったのさ」

「一寸、コンビ二まで朝飯をな。戻ってくるさ。それよりお前さん、一晩中見張りでもしてたのか？」

人使い、いやサーヴァント使い荒い、マスターもつと大変だな」

「どこかのマスターとは違い、魔力供給さえされていればサーヴァントは疲れる事はない。造作もない事だ」

随分、棘のある言い方だな。

「それでもだ、ご苦労さん。まあ衛宮はポンコツだが俺の友だ。あまり苛めんなよ？」

昨日のバーサーカーと戦った時、最後の一撃、セイバーや衛宮も居たがお構いなしだったしな。まあ、よきせぬ共闘になったって事だろうけど。俺の第六感がそれだけじゃないよと告げている。

「…わからんな。サーヴァントとも遣り合える程の力量と冷徹に下せる判断力、私を知るに最高峰の魔術師だと思うのだが、何故君ほどの男がアレの肩を持つ？」

再び腕を組み片目でこちらを向くアーチャー。

画になりますね、イケメン滅びろ。

逆になんでそんなに衛宮に嫌悪感を持っているの君は？

「なんだ、もつと俺の根本的なことを聞いてくると思ったけど、大した質問じゃないな。——真っ直ぐで我武者羅な若者は応援したいという老婆心とでも言おうか。そもそも友とは理屈や打算で計れぬものだと思うな」

なんかサーヴァントと対峙してる時ってだんだん口調と思考が前世に近くなってくるのだが、コイツ相手だと何かちよつと違う。

「君の正体はそのうちに私のマスターに話してくれるのだろうか？
なら、今は私の個人的な疑問を優先したまでだ」

「左様ですか、で、他には趣味やスリーサイズなどを聞きたいとお前は男もいける口か？ 残念だが俺は女の子が好きだ。だから君の好意は受け取れません」

長々とアーチャーと話しててもしょうがない。とつとコンビニへ行こう。

「馬鹿か貴様は！」

「ハイハイ。振られて暴言吐くなんて最低ですね。それじゃ」

「貴様など野垂れ死んでしまえ」

アーチャーの罵倒を背に受け一路コンビニへ向かう。

コンビニの前で大量のヤンキーに絡まれて絶望した。

「ゼエ、ハア……」

まったく、疲れた。

アレは間違いなくアーチャーの呪い。

こんな朝早くになんで狙ったようにヤンキーがコンビニに居るのだ。

しかも大量に。

”お話し合い”の末、少しばかり朝餉のグレードが上がったが。

無論、ブーストは使えないし、腕力にまかせて”お話し合い”してもスプラッターな惨劇になる。もう力の加減が難しいたらありゃしない。

おかげで服がズタボロだぜ。

衛宮に帰ったらあやまらなけやな。

きつと呪いに違いない。間違いない。

アーチャーは根に持つタイプなんだ。

柳洞寺に行ってお祓いしてもらおう。

後、魔力の回復。

あそこは龍脈が通っているようで、所謂パワースポットだ。禅組んで瞑想してれば幾らか早い回復が期待できるだろう。

その前にあの階段上るのは酷だが。

本日の予定を組みながら衛宮邸に舞い戻る。

——ヒュン　ズサッ

「……………」

俺の足元に矢が刺さって消えた。

——ヒュン　ズサッ

今度は完全に狙ってやがった。

「オイ！　コラア！！　姿を現しやがれっフニヤ。ん野郎！！」

「ククク……………」

姿を見せずに

喧嘩売ってんよね？　これ。　狩っちゃっていいよね！？

ヤンキーとの”お話し合い”で、こちとら鬱憤溜まりまくってんだ。

「そこだ！！」

——ドコンッ

衛宮さんの家の瓦が何枚か爆ぜる。　ゴメンあとで直す。

あ、当たった。

ざまあみやがれ！

「ププッ、アレくらいの魔術でダメージ食らうなんてダッサ！」

えねるぎー弾的なヤツ。ぶっ放してやった。

「覚悟はいいな？」

鷹のような鋭い目つきの赤い外套の男、その手には短剣が2本。

「上等だコラア！ Ouvrez！」

衛宮邸の庭に降り立つアーチャーと対峙。

その光景は何の冗談か？

「テメエ！ 弓使いの癖に二刀流なんてしてんじゃねえ！」

「弓使いが剣を使って何が悪い！」

「あ、男もいけますって言う意味ですか洒落てますね！！」

「きさまあああー!!」

朝、騒がしいと目を覚ましてみたら、自分のサーヴァントとクラスメイトが、人間を超えた戦いをしているのだ。

「これだから女にモテぬヤツは」

「おまつ！ おまつ！ それは触れちゃならねえところだろうが！

割とどうでもいい事を罵り合いながら。

「アーチャー！ アンタ何やってるの！ 今すぐ止めなさい」

危なくなったら令呪を使っても止めないと。

「リン！ コイツは今ここで討ち果たすべきだ！」

「遠坂止めるんじゃない！ コイツは俺の拳で躡る！」

な、何がどうなってるの？

「セイバー、これどうなってるの？」

先に騒ぎに駆けつけていたセイバーに声をかける。

「…リン。貴女が命令したのでないのですね？」

「当たり前じゃないの！」

なんで月見里君を…。って、それにしても昨日も思ったけど人間じゃないわね。

この間にも衛宮君の家の庭の形が刻々と変化している。

「私が駆けつけた時には既に」

セイバーも困惑していた。

「二人に声をかけたのですが、どうも要領得ませんでして」

何故止めてくれないかと聞けば。

私は騎士ですから正々堂々の戦いに邪魔はできませんと答えるセイバー。

それにお互いが止めるなと言ったからだそうだ。

それから聞けば、聞くに堪えない暴言罵倒の数々を繰り返して、

お互いの罵り合い。

結論、人間の領域を超えた喧嘩をしているのだ。

私、頭痛い。

「セイバーお願いよ。どっちでもいいから割と本気でぶっ飛ばし

てきてくれる？」

「…リン。」

「何もいわないで」

「ぬううう！」

やるじゃないか、アーチャー。

むしろ俺がサーヴァントと渡り合えているのが異常か。
いやはや、なんだかんだと愉しいな。

ってうわぁ。

衛宮家の庭が随分と前衛的な事になっている。

「アーチャー」

「何だ貴様の戯言は聞き飽きた」

コイツもコイツでちょっと愉しそうだな。

「ここらで分けようじゃないか。見ろ、この惨状」

「ふむ。私のマスターもご立腹のようだ。仕方あるまい」

お互い得物を降ろしたところで突風に仲良く吹っ飛ばされた。

その後、遠坂に正座させられ説教が足が痺れて感覚がなくなるまで続いた。

もちろんアーチャーも。

衛宮はよほど昨日疲れたのか、説教が終わっても起きてきてくれなかった。

この日、俺とアーチャーに間に何か生まれた。

「さて、それじゃあ話してもらいましょうか？」

散々、説教した挙句とっても偉そうな遠坂です。

衛宮はまだ起きてこない。

ここって衛宮さん家の居間ですよ？

まあいいけど、

「そうだな。その前に衛宮の具合は？」

「昨日のうちに傷は全部塞がりましたから問題ありません」

そうか、あいつ治癒魔法使えたのか。意外とやるじゃないの。

「ならいい。じゃあ、昨日言った”二人だけで話したい事”からしよう。」

もちろん聞き耳たててるアーチャーもセイバーも聞いてくれていいぞ」

居間には遠坂、霊体化したアーチャーそれにセイバー、俺。

「どういうこと？」

「つまり衛宮だけには聞かせたくない話って訳だ」

「なるほどね。それで？」

「大した事じゃない、学園に仕掛けた結界は遠坂が張った物ではないな？」

もうこんな事するような奴じゃないと分っているが確認のため。

「ええ、違うわ。貴方も気付いてたのね。いえ、気付いた上であの結界にちよっかい出してたのね？」

苦虫を噛んだような表情の遠坂。よほど気に食わなかったようだな。

「おう。しばらくは発動できまい。これに懲りずに基点見かけたらガンガンやっていこうと思うが、何か異論は？」

「ないわ。むしろ、悔しいけど貴方のほうがうまくやっていた」

フンツとそっぽ向く遠坂。プライド高いなコイツ。
そしてここからが衛宮に聞かせたくない話。

「で、本題だが”間桐桜”は、まほ…魔術師か？ その場合、今回の聖杯戦争の参加の有無、ひいてはあの結界の犯人の可能性、それとも他の犯人の場合、目星はあるか？ ということだ。」

毎回この地で行われる聖杯戦争。その辺の事情に詳しい遠坂だ。
この街の魔術師が何人居るとか知っていそうだし、
こちらの世界の魔術師の常識を考える上で、俺には判らない事も多いからな。

俺も戦争が始まる前なら桜嬢を捨て置くのだが、事が事だけに小さな疑惑も潰しておきたい。

「——ッ！ そう、それも気付いたのね？ほんと腹が立つほど貴方は優秀なのね。でも間桐の家は魔術師の家系として落ちぶれているといっている。だから彼女は強い魔術師でもないしマスターでもないわ。これは確認済み。あんな馬鹿げた結界、私だって何日もかかるもの、一日で彼女が作れるはずないわ」

「やっぱり、あの結界はサーヴァントか？」

「ええ、間違いなくサーヴァントでしょ。犯人は学校関係者が怪しいけど特定はできてないわ」

「ふむ。それいつ確認したんだ？ 衛宮は昨日の晩にセイバーを召喚したんだぞ」

衛宮よりは少なくとも確立はありそうだ。

「……………」

何そのアチャーって顔。可愛いけどさ…。

これは考えてなかったな、悪いが桜嬢はグレーだな。

「マスターの目印ってのは令呪の他に何か分るものないのか？」

「無いわね」

「そうか、仕方ない。衛宮を桜嬢にけしかけるか。もしくは逆か。しかし衛宮にばれないようにするには……催眠薬か？ それとも媚薬？ その辺魔術師に効くのか……。いつそ衛宮を泥酔させて服引ん剥いたところに桜嬢を介抱させに向かわせれば……」

「アンタ、結構えげつない考えするのね」

おっといかんいかん。遠坂が若干引いてる。

「だってしょうがないだろ？ 俺が桜嬢の服引ん剥く訳にやいないし、もし令呪が無ければ俺、性犯罪者になっちゃうじゃん？」

その点、衛宮なら少なくとも桜嬢はあのポンコツに好意向けてるし、もしそのまま既成事実を作ってくれば、真面目なアイツは責任取る。奴のハーレムは潰えて一石二鳥」

「アンタを一瞬でも凄いと思った私が馬鹿だったのね。いいわ私がおもう一度確認する」

「そうかい、それじゃあ一先ず、俺の懸念事項はクリアだ。あとはどうでもいいことなんだが、気絶した俺を誰がここまで運んだんだ？」

「ああ、それねアーチャーよ」

そうですか。そりゃそうだよな。薄々気付いていたが。

「ありがとうアーチャー」

どこ居るかわからんがとりあえず、俺もつお前罵ったりしない。

「ワタル、泣いているのですか？」

「え、ああ、なんでだろうね。ちくせう」

目からしょっぱいのが……。

「さ、じゃあ私の番。まず、月見里君はこの戦争どうしようというの？」

俺の涙はスルーですね、わかります。

「随分と抽象的な質問だな。でも。衛宮がいなくてよかった質問だな。はっきり言ってもいい。魔術師同士で殺し合い？ どうぞご勝手に。聖杯？ 誰が持つて行こうか関係ない。ただ、俺に危害を加える奴と、俺の気に入ってる奴に危害を加える奴、学園に結界を張った奴は別。特に結界張った奴は必ず張り倒す。あとは知らない誰かが聖杯戦争に巻き込まれて死んでもかまわない」

衛宮が聞いたら怒りそうだな。

あいつなら誰も犠牲にならなければいいとか思ってたそうなもの。

「なっ！？」

遠坂ではなくセイバーの声。

「俺は助きたい奴しか助けないんだセイバー」

残念ながら正義のヒーロータイプの人間じゃないのだ。

「それではワタルは目の前でサーヴァントに襲われている人間が見ず知らずの者なら助けないのでですか！」

そう言ってるじゃないの。だけど、

「だから困ってるんだよ。俺の気に入った、助けたいの中に衛宮は勿論、遠坂やセイバーも入ってるんだから。あのポンコツは力はないが正義感は一倍、危なくて放っておけない。遠坂にも傷ついて欲しくないし、もちろんセイバーにもな」

それじゃあ本格的に介入しなきゃならんだろう。ポンコツが生き残るために手を貸さないと、きっとアイツはすべて

を救いたがる。

一人で救えるのは限りがある。なら二人でもうちよつと救おうじゃないかってな。

あとは、

「遠坂、セイバー、セイバーは自分をどう思ってるかしらないが、二人は超絶美少女なんだぜ」

「……」
「……」

何で押し黙るの？ たまにこついつのあるよね？ なんで？

「美少女の損失は世界の損失だ。覚えておくといい」

「……」
「……」

これ完全に滑ってる！？ ねえ滑ってる？ 誰か教えて！

無言が心に突き刺さるの——！ ねえなんか言ってる——！

決闘？いえ喧嘩です（後書き）

いわゆるカオス

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2296z/>

Fate/Je suis inconnu

2011年12月16日07時15分発行